

## プロソポグラフィ

ジョージ・ビーチ

(中堀博司訳)

### Prosopography

George BEECH

translated by Hiroshi NAKAHORI

### 解 題

本稿は、J. M. パウエル編『中世研究入門』（第2版、シラキューズ大学出版会、1992年）所収、第5章「プロソポグラフィ」（ジョージ・ビーチ著）の全訳である<sup>1</sup>。但し、項目毎に分類された参考文献は、やや古くなっていることや、現在ではインターネット上の関連サイトから文献検索が容易にできることもあって一部は割愛し、本文中に引用されているものに限って一括して末尾に掲載した<sup>2</sup>。

本邦訳の原著論文が取められた『中世研究入門』第2版は13章から構成され、各章に異なる専門研究者によって西洋中世史研究にかかわる方法論および補助学が著されている<sup>3</sup>。同書は、初学者が西洋中世史学を学ぶに当たっての文字通りの入門書であるが、ここでの初学者とは、学生であれ研究者であれ、多少なりとも中世史学の専門的基礎知識を身につけた上で、実際に原史料を手にとり、新たな研究を切り拓こうとする者である。そもそも、わが国西洋史学界は、まず海外の研究成果を十分に摂取することをもって事始めとしてきたが、近年、海外渡航や留学が容易になって、現地で生の史料に取り組みながら、基礎知識を固めていくようなスタイルも可能となり、その際、史料、特に未刊行のマニュスクリプトを処理する知識の不足が日常的な外国語の語学力における制約とも相俟ってさらなる障碍を招いているのである。そうしたことから、近年、邦語で初めて西洋中世学に関する実践的方法の書が著された<sup>4</sup>。実際のところ、それも日が浅く、特に史料の取り扱いにかかわるマニュアルに関しては、史料論という形で史料そのものへの関心が高まっている現状を考えれば<sup>5</sup>、今後益々需要があるものと思われる。本邦訳は、こうしたわが国西洋史学における原史料への取り組みの一助となることを期したものである。

ところで、プロソポグラフィは、既に20世紀前半から取り組まれてきたが、特に1970年代から80年代にかけて欧米学界で隆盛を極めた方法論であり、19世紀の非常に静態的な制度史とは異なって、制度を動かす複数の人間に注目し、その人間たちの地理的・社会的出自、学歴・職歴、財産形成や投資、また、その家・親族を含んだ人間関係などから制度や集団を理解しようとするものである。欧米各国では1960年代以降次第に大きな潮流となり、古代史から近現代史

までの様々な分野で幅広く活用されて多くの成果を上げてきたのである。訳者も無味乾燥気味な19世紀の制度史を刷新してきたのが、プロソポグラフィの手法を通じた社会史的な新たな政治史であったことを強く認識し、十数年来研究を進めてきたが<sup>6</sup>、わが国の西洋史研究者にとっては既によく知られた方法論ではあっても、欧米の歴史に直接かかわることが少なく、また史料状況も異なる日本史や東洋史の研究者にとっては恐らくさほど馴染みのある表現ではないように思われる。また、先に取り上げた邦語による西洋中世学の入門書ですら、実際このテーマを正面から取り上げてはならず<sup>7</sup>、原著発行時（1992年）から既に15年以上を経てはいるが、それでも20世紀後半に普及したプロソポグラフィ的手法の広まりが要を得て執筆されているため、本邦訳に踏み切ることにした。ある集団を明らかにするために、構成員各人のプロフィールや人間関係を丹念に調べることは、現代のジャーナリズムではごく当たり前のことでも、前近代史にあっては史料制約が極めて大きく、さほど容易なことではなかったのである。実際、共同作業やコンピュータの活用がなければ、果てしなく地道な作業であり、所期の目的が達成されるまでには非常に長い道程が必要なのである。例えば、ヨーロッパ前近代史に関するわが国での実践例として、安成英樹による17～18世紀フランスにおける地方長官就任者に関する優れた分析が想起されるが、著者によるコンピュータを駆使した丹念な入力作業と分析の基礎には、現地で編纂された人名事典が存在し<sup>8</sup>、プロソポグラフィが共同作業と技術的向上の所産であることをよく示している。さらには、こうした事典編纂自体が、以下、本邦訳にみるような研究史上の大きな潮流を背景としていたであろうことも忘れてはならない<sup>9</sup>。

原著者ジョージ・ビーチ氏は、原著「著者紹介」に拠れば、執筆当時ウェスタンミシガン大学教授で同大学中世研究所のメンバーであった。1960年にジョンズホプキンス大学にて博士号を取得し、マサチューセッツ大学およびスウォースモア・カレッジにて教歴を積んでいる。また、重要な画期として本邦訳で言及される専門学術誌『中世プロソポグラフィ』（1980年～）創刊の発起人で編集者の一人であり、主著としては『中世フランスにおける農村社会——11～12世紀ポワトゥのガティーンヌ——』（1965年）、『それ自体への世界——ある中世農村の生活——』（1975年）がある。その他、アキテーヌ貴族、ギヨーム9世トゥルバドゥール、人名学、ノルマン征服前後のイングランド・アキテーヌ関係、等々に関する論文多数とのことであり、中世中期フランス南西部農村史・貴族史の専門家である。著者自身が、本邦訳で示されるプロソポグラフィにかかわる研究潮流に棹さしてきたことは明らかで、そうした体験が十分活かされた叙述となっていることも指摘しておきたい。著者が、初版から経た15年をしばしば回顧する所以でもあろう。現在、著者はウェスタンミシガン大学名誉教授であり、同大学HPから同氏の詳細な業績一覧も閲覧可能となっている<sup>10</sup>。

なお、この原著論文は、2007年度前・後学期の本学部における西洋史ゼミ「外国史演習Ⅰ・Ⅱ」の講読テキストとしたものであり、本邦訳が飽田麻衣、唐田奈津見、佐藤勲、橘木李沙、前園真一郎の学生諸君との共同作業による産物であること、また、本誌掲載に際して、著者ジョージ・ビーチ氏ならびに出版者シラキューズ大学出版会の快諾を得たことを付記しておく。

（中堀博司）

## 翻 訳

## プロソポグラフィ

ジョージ・ビーチ

[p.185]<sup>11</sup>

「プロソポグラフィ」(*prosopography*)は、この20世紀の早い時期に古代史家や近代史家からかなりの注目を集めた史的探究の一形態であり、今では中世研究の中にしっかりと根づいている。それはある特定の時期に影響力をもった人々を同定しながら探究するもので、当時の社会で権力の伴う地位を保持した人々を対象とする。より明確に言えば、プロソポグラフィとは、これら有力者の出身地・出身家門、社会的地位、友人・知人、また、その他の個人的接触や経歴について伝記的情報を探索し、次に、家や個人的関係の意義を、地位、公職あるいは役職の獲得の点で、また、成人後の経歴において彼らが辿った行動過程に影響を及ぼしたかどうかという点で評価しようというものである。そうすることでプロソポグラフィ研究者は中世社会の権力構造をよりよく理解しようとしているのである<sup>12</sup>。

こうしてプロソポグラフィは、個々の事例でそれが絶えず立証したり反証したりしようとする二つの前提から行われる。第一の前提は、偶然や個々人の長所のような要因を考慮に入れない訳ではないが、家の絆が通常個人の昇進に大いに貢献するというものである。個々の家門についてのいくつかの詳細な研究がこのことをしばしば立証しており、その一般的有效性について疑いの余地はない。第一の前提と密接にかかわる第二の前提は、次のような考え方である。即ち、個人的関係が中世の制度的構造の内部作用において極めて重要な、ともすれば決定的な役割を果たしたということであり、聖俗統治のための諸制度が相対的に初歩的な発展段階にしかなかった中世前期においてはなおさらそうであった<sup>13</sup>。王や伯、司教、あるいはその他の者でも、権力を行使する何らかの人間集団の中で支配的な人物と密接な関係にあることは、権威、富、あるいは威信の源泉として公職を保有する以上に重要な傾向が強かった。そのような集団を統制する人々、つまり、王やそれに類する者は、家、主従関係、あるいはその他の従属関係で自分たちと結びついた人々に対してより依存する傾向があり、機会があれば、そうした従属関係にある人々を役人として任用しようとしたのである。言い換えれば、これはその作用を説明するような、ある権力構造内部における公職あるいは一群の公職がもつ力についての国制的ないしは法律的な描写というよりは、むしろ公職を保有する人々の間にある個人的な関係そのものなのである。制度を理解するためには、公職を保有する人々の関係を理解しなければならない。カロリング期の王やその家臣についての最近の多くの研究は、当時の最も高位の公職を保有するかなりのパーセンテージの者たちもまた、親密な個人的絆や結婚によって王家と結びついていたことを示すことで、この前提に信頼をおいてきた。そのような個人的関係のネットワークが、他の諸制度の構成員や権力エリートを結びつけていたかどうか疑問をもちながら、プロソポグラフィ研究者は、これらの個人的関係を曝き、叙述し、最終的にその関係の重要性を見極めようとするのである。

[p.186, 1.21- ]

現代のドイツの中世研究者はプロソポグラフィをしばしば「歴史人物研究」(*Historische Personenforschung*)や「人物史」(*Personengeschichte*)と呼び、そうすることでその個人伝記の側面を強調するが、問題となる人物の家族的・個人的関係についてできるだけ多くを見出すことを目指している。これを「集合伝記」あるいは「マルチ伝記」と呼ぶことで、他の歴史家は、

当時の社会の諸問題を調整したり、方向づけたり、あるいは影響を与えたりした孤立する個人よりも、むしろ人間集団とのプロソポグラフィのかかわりを重視してきた。こうした差異はあっても、プロソポグラフィ研究者は、同じような手続きを行い、焦点に絞った集団から研究を開始する。最初の段階は集団内の個人々の伝記を作成するための情報収集であり、次の段階は、それらの情報がどんな性質や特徴を共有するか、あるいはどんな点で相違するかを見出すための比較である。

プロソポグラフィ研究者は、通常、社会で最も強力であるか最も影響力のある人々に注目してきたが、この方法は重要度のより低い人々を考察するのにも十分適用されうる。実際、ある公職、役職、特定の仕事ないしは地位を共通してもった個人々からなる社会集団あるいは集団も含まれている。11世紀ドイツの教区司祭は、14世紀フランスにおける王の助言者と全く同様に研究対象となりえた。明らかに全国から来る教区司祭は、王の助言者以上に異なったあり様で社会集団を構成した。というのも王の助言者はお互い個人的に知り合いで政策を立案するためしばしば面会したからであるが、それでも同じ質問は双方に対してなされうる。彼らが何者で、どのような家を出て、どのような共同体から来たか、どこでどのように彼らは自分たちの地位を獲得したか、彼らの集団はどの程度安定した集団だったか、どのくらいの人々がより高い地位に上昇したか、どのくらいの人々が脱落していったか、等々である。このアプローチが社会階層を下げて実施されれば、それだけその集団の個々の構成員についての情報が乏しくなるのは、単に彼らが益々史料に現れなくなるからであり、これらの質問に対する答えがそれに応じて深みと正確さを失うからである。しかしながら、これは予想されることであり、プロソポグラフィが、政治家同様に社会史家にとっても不可欠な研究手段であるという事実を動かすものではない。

[p.187, 1.12- ]

仮に、史料の欠落や伝来する史料の特異な性格によって、当時影響力をもった人々についての伝記的情報が得られなかったとしたら、中世史にプロソポグラフィは必要とされなかったと、ここで指摘しておくことは恐らく適切であろう。2、3の例外はあれ、中世の文書を作成した書記が、ある人物の家族的背景、友人、経歴について、もしあったとしても明確な情報を与えてくれることは極めて稀なのである。それは間違いなく、こうした情報がたいいの場合当時記録された事件や取引には不必要か無関係なものだったからである。結果的に、俗人でも聖職者でも、中世の政治の世界で最も影響力のあった人物の多くは、既に権威や威信を帯びて残された文字記録の中に初めて現れる。家の絆やその他の個人的な関係はほとんど語られないので、それがさほど重要ではなかったか、これらの人々がいわば目立たない所から、恐らくより卑賤な背景から登場し、極めて目立った所にまで申し上がってきたと想定する方が自然な傾向にある。しかし、これまでの経験は、こうしたことが中世ヨーロッパの階層化された社会ではめったに起こらなかったということを示しており、そのような想定を戒めている。

プロソポグラフィが全くそういうものだというよりはっきりした概念は、プロソポグラフィがそういうものではないと指摘することで知らされる。プロソポグラフィは、次の点で歴史的伝記とは異なっている。つまり、とりわけ中世前期のような時代には、それは通常断片的で高度に不完全な性格を有する「複数の伝記」に至るという点であり、当該期には史資料の欠如のために歴史家は傑出した個人の名とその生涯の大凡の時・所ぐらいを知るだけで満足せざるをえない。月並みな伝記作家はそのような課題に頭を悩ませることすらしないが、この種の情報

は、他の類似した人々についての情報と関連づけられると、当然プロソポグラフィ研究者に大いに情報をもたらすことになる。

プロソポグラフィが他の点では非常に似通った制度史と異なるのは、制度史家が制度やその機能に関心をもつのに対して、プロソポグラフィ研究者は、制度を支配する人間たちに関心があるという点である。例えば、11世紀の司教座を研究する歴史家は、多くの特定の事例を基礎にして司教職について一般化しようとし、選出方法、在職者の理論上の権力や現実の権力、享受した収入、公職に付随する威信や、その他の類を記述する。これらのことすべてを念頭におきつつ、プロソポグラフィ研究者は公職を占有した人々、彼らの出身家門、司教になる前の経歴、公職を獲得した方法、彼らと結びついた人々、そして彼らが権力の座にいったん就いた後に行った政策に注目する。このことは、11～15世紀のリエージュ (Liège) 司教管区におけるより高位の聖職者 (司教、司教代理、プレヴォ (*prévôt*)<sup>14</sup>、司教座聖堂参事会長) に関する近年の研究が例証している<sup>15</sup>。この著者は、各役職者の家門、社会的地位、出身地域、その公職を占有する前の立場、権力をもつに至るのにかかわった人々や状況を確認しようとした。同著者は、各役人の情報を編集した後、その結果を結合したり比較したりして、すべての者が貴族層出身であったけれども、司教はプレヴォ以上の高い地位の家門に属し、プレヴォは参事会長よりも著名な家門に属する傾向にあることを見出した。

[p.188, 1.20- ]

最初にプロソポグラフィ研究を構想し、実行した功績は、19世紀末ドイツの古典学者であるゼーク (O. Seeck) にある<sup>16</sup>。このアプローチは、数多くの傑出した人物が碑文やパピルスのテキスト上に断片的に言及されることによって記録が残る時期に理想的に適合しており、ローマ史研究において今日まで途絶えることなく盛んに行われ続けてきた。重要人物についてのいくつかのプロソポグラフィ事典が、最近では1971年と1980年に共和政、帝政期について出版され、266年から527年の時期をカバーしており、続編も計画されている<sup>17</sup>。ゼークの最初の著作が出て数年のうちに、現代欧米の歴史家は、プロソポグラフィの手法を借用し、それぞれ自分の分野に適用した。こうした研究の分量は、それ以来確実に増加している。ストーン (Lawrence Stone) の見解では、様々な要因ないしは条件が、20世紀の歴史家のもとでプロソポグラフィによって見出され、準備された答えに貢献したという<sup>18</sup>。一方では、政治指導者の動機に懐疑的になるにつれて、伝統的な制度史に不満をもった歴史家は、政策や政治綱領の説明を制度的構造やイデオロギーを超えて探し求めるようになり、政治家の親族、友人、利害関係者を調査することに目が向けられた。他方で、社会科学の発展によって、歴史家は新たに提起される問題と、社会的・政治的分析への新たなアプローチとを提供されることになった。例えば、人類学は人間の振る舞いにおける家や親族関係の重要性に目を向けさせ、社会学は社会集団一般への注目を引いた。また、経済学は人間の行動の背後にある経済的利害を主張した。最終的にストーンは、大きな社会集団の構成員にかかわる大量データを分析するのに、かつてであれば思いもよらなかった試みを促進したものとして、新たにコンピュータと結びついた数量化の技術的発達を挙げている。

[p.189, 1.5- ]

古代と中世の世界が年代的に近く、なおかつ、同様に貧弱な史料状況であることを考えると、中世研究者が自分たちの時代にローマ史家の技術をすぐに採用したことは驚くにあたらない。しかし、プロソポグラフィによる探究は、第二次世界大戦以前には極めて稀であった<sup>19</sup>。1940



年代後半から50年代にかけてプロソポグラフィに対する興味は得られたが、プロソポグラフィのアプローチがかなりの中世研究者に採用され始めたのはようやく60年代から70年代にかけての十数年においてである。その後、このアプローチを採用した多くの新しい重要な研究が出版され、その有用性を証明し、これまでこの名称が何を意味しているか不思議に思っていた研究者にも、それが広く多様な領域でうまく実施されうるということを納得させた。新たな出版物が増加するのに伴って、関係する研究者の便宜のために、多少なりとも文献の整理を行う必要が生じてきた。こうして、1970年代後半に、『フランキア。西ヨーロッパ史研究』(*Francia: Forschungen zur Westeuropäischen Geschichte*)の編集者が「プロソポグラフィア」(*Prosopographia*)の表題のもと研究ノートや書評論文の別冊シリーズを刊行し始め、1980年には『中世プロソポグラフィ』(*Medieval Prosopography*)という最初の学術誌が創刊される。同誌に寄稿する編集者の二人が、1982年12月にビーレフェルト(Bielefeld)で中世プロソポグラフィに関する国際研究集会を組織し<sup>20</sup>、さらに続いて1984年10月にパリで、「プロソポグラフィと近代国家の生成」および「コンピュータとプロソポグラフィ」と題される二つの国際研究集会が開催された<sup>21</sup>。

過去15年から20年の間に出版された研究のサーヴェイは、この種の大量の作業が中世社会における様々なエリート集団の研究に集中してきたことを明らかにしている。予想されたように、貴族や、異なるレベルで統治にかかわった役人、身分制議会の構成員など、政治的・社会的に影響力をもった人々が、その他の集団以上に注目を引いた。しかし教会の高位聖職者、特に司教や司教座聖堂参事会についても、修道士の共同体についてと同様に、多くの研究がなされている。大学の学生や教師も無視されてこなかった。他方、都市エリートについては、相対的にほとんど研究がなされておらず<sup>22</sup>、農民に焦点を絞った研究はなおさら少ない。問題となる研究のほとんどはたった一人で作業する個々の研究者が行ったものである。にもかかわらず、研究者のチームを含んだいくつもの大規模な共同事業が現在進行中であり、印象的な成果を上げてきた。

プロソポグラフィを中世史に適用するに際して、以前には無視されてきた史料から情報を引き出すための新たな方法を発展させたという点で、また、出版した仕事の分量や多様性の点で、ドイツの研究者が過去30年の間先頭に立ってきた。既に1939年にその『ドイツ帝国の形成期における王国と諸部族』で著名となったテレンバッハ(Gerd Tellenbach)は、ドイツにおけるプロソポグラフィ研究者の第一世代に拭い去れない刻印を残しており、同世代の研究者の多くはフライブルク研究グループの一員として彼の下で研究を行った。1944年から1964年までのフライブルク(Freiburg)での20年間に、彼は60名以上の博士課程学生の学位請求論文を指導したが、その多くはプロソポグラフィに関するものであった<sup>23</sup>。これらの学生の多くは、現在ドイツの大学で中世史講座のポストを占めており、そこで自分たちの学生を教育しながら、自らの研究と出版を継続しているのである。

[p.190, 19- ]

1960年代の後半に、フライブルクでテレンバッハの後継者となったシュミット(Karl Schmid)と、ミュンスター(Münster)のヴォラシュ(Joachim Wollasch)の二人の研究者が協力し、過去20年の中世研究で疑いなく最も大きなプロソポグラフィの企画となるものを展開した。彼らのプロジェクト「ソキエタスとフラテルニタス(*Societas et Fraternitas*) [仲間関係と兄弟関係]。中世の人間と人間集団の研究のための註解資料集の創刊」の目標は、9世紀から

12世紀までの神聖ローマ帝国、フランスおよびイタリアにおける世俗、教会、修道院で傑出した人物のプロソポグラフィを行うことであった<sup>24</sup>。その史料は、修道院の追悼者名簿 (necrologies)、記念祈禱設定簿 (obituaries)、祈禱兄弟盟約書 (confraternity agreements)、そして生者と死者を記念する証書を含むその他の文字記録であった。これらの記録は、9～10世紀のように史料が他には乏しい時期に相対的に豊富に存在し、数千にも上る大量の人名を残しており、その中には、当時の最も著名な人物も多く含まれたが、歴史家はそれまでこれらの史料をほとんど使用してこなかったのである。その理由には、以下のことが挙げられる。即ち、なかには刊本が欠如しているものがあること、その他では刊本はあっても不備があること、そして最後に最も決定的なこととしては、研究者が関連する大半の人々を同定できないことがあり、それは、人々が当時の慣習に従って単一の名しかもたず、そのため他の似通った名をもつ者と通常判別できなかったからである。それ故に問題は、これらのリストの匿名性を打ち破り、個々人の識別を可能にする方法をうまく見出すことであった。その鍵となるのは、孤立した個人よりも、むしろ史料に名がみられる大部分の人が構成員となっているような集団に焦点を絞り、異なる記録に繰り返し現れることからその集団を特定しようとすることである。そうすると傑出した個人は、親類、友人、家臣の特定の集団の構成員であることを通じて特定されるのである。当初からシュミットとヴォラシュは、この様々な記念書の出版に根本的な力点をおくことからプロジェクトを始めるべきであると主張し、それもオリジナルの外装をできる限り保存した極めて質の高い刊本として出版すべきであるとした。事実、カラーを再現できない点のみオリジナルとは異なった、最高級の写真複写版を支持したのである<sup>25</sup>。

1967年、ドイツ政府（ドイツ研究団体）からの継続的な補助金により、「人と共同体」と題する計画が、「特別研究領域7」と呼ばれる中世前期社会研究の大きな学際的プログラム（中世研究）の一部としてミュンスターに拠点をおくこととなった。同時に『前期中世研究』（*Frühmittelalterstudien* = *FMS*）が創刊され、同誌は、このプロジェクト・メンバーによるモノグラフの多くを出版するとともに、前期中世研究一般のための優れた雑誌となった。政府補助金が給付された間（1967～1985年）に*FMS*誌上に発表された年次報告 (Berichte) は、「ソキエタスとフラテルニタス」の極めて重厚な活動報告と公表の場となり、計画を遂行するだけでなく狙いを定めていくのにも計り知れない役割を担った。特別研究領域7は、*FMS*誌に加えて「ミュンスター中世叢書」（*Münstersche Mittelalterschriften*）シリーズも創刊し、1970年以降約50の個別研究を出版したが、多くは「ソキエタスとフラテルニタス」のメンバーによって著されたものである。

[p.191, 1.14-]

このグループのメンバーは、活動してきた20年間に、8～12世紀の追悼者名簿、祈禱兄弟盟約書、「記念書」（*libri memoriales*）ほか10余りの異なる修道会についての記念テキストを公開してきた（文献目録にある次の著作を参照のこと。Althoff, 1978; Kloostergemeinschaft von Fulda, 1978; Liber Memorialis von Remiremont, 1970; Liber Vitae von Corvey, 1983; Materialien, 1986; Neiske, 1979; Synopse, 1982; Totenbücher, 1983; Verbrüderungsbuch, 1979）。このうちの二つがその射程と重要性において他に抜きん出ているが、それはフルダ (Fulda) とクリュニ (Cluny) のものである。フルダの5巻にわたる追悼者史料の1978年版は、修道院の縁起に関する論考とともにオリジナルの史料を掲げ、史料に名がみられる非常に多くの人々を同定するプロソポグラフィ調査を絡めて出版したものである。10人の研究者が、この記念碑

的な版を共同出版した。1982年に出た2巻本でのクリュニの追悼者名簿の概要は、リモージュ (Limoges) やモワサック (Moissac) などのクリュニ系列の7つの修道院に現存する追悼者名簿を基礎にして、クリュニ修道院の失われた追悼者名簿を復元しようとするものであり、各々の版からエントリーして同時並行で作成された版なのである。この7つのそれぞれの複写版は、傑出した人物に関するプロソポグラフィの註記を付して出版されることが計画されている。

これらのテキストの出版に加えて、「ソキエタスとフラテルニタス」の指導者は、自分たちの計画が一連の歴史補助学に値するものと考えた。各専門項目は、例えば、「史料伝来」、「古書冊学」(codicology)、「古書体学」(paleography)、「人名」、そして最も重要なものとして、「文字記録に現れる個人と集団に関するプロソポグラフィ調査」というようにである。1981年、この計画の到達点と展望に関する概要が出された時、このカテゴリに入る個別モノグラフは既に150近くにも上り、参加した研究者は十分20名を超えていたのである<sup>26</sup>。

正式には特別研究領域7の一部に含まれなかったが、フライブルクの他のドイツ人研究者グループは、シュミット指導下のミュンスター学派と密接にかかわって作業してきた。「集団形成と集団意識」と題される研究計画とともに、フライブルクの研究者は、プロソポグラフィ調査に使用するためあらゆる種類の記念文書から名前を抽出し、コンピュータ処理したデータベース(1983年までに約40万件)を編集したのである<sup>27</sup>。

[p.192, 1.7- ]

ミュンスターのプロジェクトが進行する以前にも、イギリスの研究者グループは、大きな集団的プロジェクトである「ローマ帝政後期のプロソポグラフィ」に着手していた。英国学士院がこの企画を支援し、ケンブリッジの古典研究者が実施したのであるが、ジョーンズ (A. H. M. Jones) が、亡くなる1970年まで指導し、以後ここ最近ではマーチンデイル (J. R. Martindale) がこれを指導してきた。このグループが目標としたのは、対象期の帝国におけるすべての著名な俗人について、オリジナル史料のレファレンスを付した伝記的な註記を出版することであり、こうしてこれまでに2500頁にも及ぶ2巻本を出版した。この両巻とも中世研究者にかかわるものである。第1巻は260～395年を扱い、第2巻では395～527年を対象としている。文献目録の *Prosopography I* (1971), *II* (1980) を参照のこと。第3巻および最終巻は527～640年を対象とする予定である(このプロジェクトに関しては、Mathisen 1986およびHeinzalmann 1982を参照)。

同時にパリ・ソルボンヌ大学のマルゥ (H.-I. Marrou) とパラंक (J.-R. Palanque) の指導によるフランスの研究者チームが、イギリス人によって見過ごされていた同時期の宗教的図像を対象とする「キリスト教徒のプロソポグラフィ」を、碑文・文芸アカデミーの後援下で準備していた。主要著者であるマンドゥーズ (André Mandouze) とともに、このチームは303～533年の時期の属州アフリカにかかわる伝記的註記の第1巻を1982年に出版したが、この企画は非常に息の長いものであった (*Prosopographie Chrétienne* 1982)。これらのプロジェクトがともに未完成だとしても、研究者は既に後期ローマや前期中世の社会を対象にした比較にならないほどの伝記的記録集成にアクセスできるのであり、後の時期について比肩しうる情報蓄積を行おうとする中世研究者にとってもモデルとして役立つであろう。

先のプロジェクトと並行して、ヴェルナー (K. F. Werner) によって指導される在パリ・ドイツ歴史研究所のプロジェクトが開始され、PROL (*Prosopographia regnorum orbis latini*) [「ラテン語圏諸王国のプロソポグラフィ」] と題された。それは1960年代後半に始まり、後期ローマから12世紀までの西方ラテン語圏諸王国における著名人に関する伝記的註記の記録集成



を作成することをその目的とした（但し、コンピュータ管理されていない）。1979年までに、このグループのメンバーは30万人以上もの個人の登録を行い、そして1世紀分だけは、テキストに言及されたすべての人物について完全に史料にアクセスできるようにすることも考えていた（Werner 1977）。

前述した各企画はプロソポグラフィを明らかに対象とするものであるが、異なる目的をもちながら依然としてプロソポグラフィ研究者にも関連するような進行中の企画が他にも存在しており、参考になる。このカテゴリに入るのがドイツのプロジェクト「司教シリーズ」であり、ガムズ（P. B. Gams）（1873-86年）による同名の著作を再開・拡張し、完成させることを目標として1976年に始められた。その嚆矢から1198年までのラテン語圏諸教会のすべての司教の名と日付という最低限の記載項目に替えて、新たなプロジェクトの共同指導者であるアイヒシュテット（Eichstätt）のヴァインフルター（S. Weinfurter）およびケルン（Köln）のエンゲルス（O. Engels）は、100人近くの共同研究者と協力して、入手可能な司教にかかわる極めて重要な伝記や経歴の情報はるかに多く掲載することを提案した。このシリーズで2巻が既に出版されているが、このシリーズが完成すると、特定の司教の情報を必要とする中世研究者各人にとって優れた研究道具となるであろう（*Series episcoporum* 1982, 1984）。

[p.193, 1.14- ]

イギリス議会史はもう一つの大きな次元でのプロジェクトであり、中世後期イングランドの統治や社会について、プロソポグラフィ研究者にとって価値ある情報を提供するであろう。この企画の中世部門は、近代部門より遅れて1983年に、1386～1422年の議会開催を射程とする「第一局面」と呼ばれる計画を行った。これだけで約3200の伝記的註記（Clark and Rawcliffe 1983）の準備を含んでいる。この間、最近のより限られた範囲での研究が、1295～1340年の議会における下級聖職者の代表の問題に取り組んでいる（Denton and Dooley 1987）。

このように集団的な学術プロジェクトがその視野や年代の広がりを通して際立ってはいるが、ごく最近のプロソポグラフィ研究は個人の研究者によって行われてきた。差し当たりの好例としては、中世前期の社会的・政治的エリートについての最近の出版である。ドイツの研究者は、多かれ少なかれPLREの著者と同じ形式を採用しつつ、いくつかの初期ゲルマン王国における傑出した人々について、伝記的註記のリストを作成してきた。事例としては、メロヴィング王国（Ebling 1974; Selle-Hosbach 1974）、イタリア・ロンバルド王国（Jarnut 1972; Hlawitschka 1960）、スペイン・西ゴート王国とスエヴィ王国（Garcia Moreno 1974; Claude 1978）の役人が挙げられる<sup>28</sup>。場合によっては、名を挙げた人々の相互関係を付随的に明らかにする分析であったり（Althoff 1984）、伝記的リストの伴わない分析のみのものもあった（Werner 1965）。ミュンスター＝フライブルク学派による前述の仕事は、9～11世紀の帝国、フランス、イタリアでの俗人、聖職者、修道院の諸集団についてのプロソポグラフィ調査の最も優れたものであった。

十字軍史家は最近、第4回十字軍に関するロンニョン（J. Longnon）のモノグラフ（1978年）や第5回十字軍に関するパウエル（J. M. Powell）のもの（1986年）にみられたように、自分たちの研究にプロソポグラフィ的なアプローチを採用し始めてきた。関連するものとしては、ウォジェッキ（D. Wojtecki）の13世紀におけるドイツ騎士団の研究（1971年）が挙げられる。

[p.194, 1.4- ]

多くの英米の研究者が、近年、アングロ・サクソン後期およびアングロ・ノルマン期により

積極的に取り組んできた。その出版物の大半は、様々なところに短編で出された論考であるが、キーリー(Kealey) (1981年) やターナー(Turner) (1985、1988年) の著作のような長編のモノグラフも出版されている<sup>29</sup>。ノルマン世界の別の部分についての重要な仕事は、11～12世紀に南イタリアおよびシチリアに定住したノルマン人とフランス人の諸家系のリストであった(Ménagier 1981)。1984年までにアングロ＝ノルマン研究は、ある研究グループがアングロ＝ノルマン期にかかわる伝記事典の編纂を提案するところまで進展した(Chandler, Newman, and Spear 1984)。この時期を対象とするプロソポグラフィ研究者にとって、潜在的に非常に有益なのが、カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校の研究者チームによるドゥームズデイ・ブックのコンピュータ処理であり、テキストに挙がる何千人もの人々の名を容易に入手できるのである<sup>30</sup>。

13～14世紀の政治エリートの研究については、過去10年に新たな多数のモノグラフが出版された。その中にはエヴァーゲイツ(T. Evergates)のトロワ周辺地域の貴族研究(1975年)、ニューマン(W. M. Newman)によるピカルディ(Picardie)のネスル(Nesle)領主に関する詳細なモノグラフ(1971年)、ドゥミュルジェ(A. Demurger)の15世紀初頭フランスにおける国王バイイ(bailli)・セネシャル(sénéchal)についての調査(1978年)、ロゴツィンスキ(J. Rogozinski)の14世紀モンペリエ(Montpellier)に関する著作、そしてとりわけオトラン(Fr. Autrand)の14世紀半ばから15世紀半ばまでのパリ高等法院における指導的メンバー(678人全員)に関する重要な学位論文が含まれている<sup>31</sup>。イギリスでは二つの重要な研究の事例があるが、一つはマクファーレン(K. B. McFarlane)の中世後期イングランド貴族に関する著作(1973年)で、もう一つはソウル(N. Saul)の14世紀グロスターシャ(Gloucestershire)のジェントリに関するもの(1981年)である。

中世ヨーロッパの教会や修道院の世界に目を向けると、過去20年における大量の新しい著作に出くわすことになる。最も重要なものだけに触れるとすれば、まず司教職に関するものである。ガムズの「司教シリーズ」の再開という巨大なプロジェクトについては既に言及してきた(前述81頁)。ロンドンの歴史調査研究所は同様に、18世紀のル・ネヴ(John Le Neve)の『イングランド教会史年表』(*Fasti Ecclesiae Anglie*)の再編にかかわってきたが、これはイングランドおよびウェールズの司教、司教座聖堂参事会の高位聖職者および参事会員を、史料レファレンスつきで何巻にもわたってリスト化したものである(Greenway 1980)。カンブ(N. Kamp)によるシチリア王国の司教(1194-1266年)に関する3巻からなるプロソポグラフィは、記念碑的なものである(1973-75年)。ツィーリンスキー(H. Zielinski)は11世紀の帝国ドイツの司教を分析した最初の巻を出版し(1984年)、伝記的註記が著される第2巻が続く予定である。多くの研究者が、中世の司教座聖堂参事会に苦勞して取り組み、誰が参事会員であったか、どのような人間がこの公職に上りつめたか、などの疑問に解答を与えてきた。ミエ(H. Millet)による1272～1412年のラン(Laon)の約800名の参事会員の研究が、こうしたモノグラフの中でも最も広範囲に及ぶ調査の産物である。類似した身元確認の試みは修道士の共同体にも向けられてきたが、特に顕著なのがミュンスター学派による数多くのモノグラフの中にみられるもので、先に言及したフルダやクリュニについての詳細な研究もその中に含まれている。8～9世紀フランスにおける修道士や律修参事会員の共同体についてのデクスル(O. Dexle)によるプロソポグラフィがもう一つの事例であり(1978年)、トムスン(W. R. Thomson)による1226～61年に司教になった約50名のフランシスコ会修道士に関するモノグラフ(1975年)も同様であ

る。アメリカの研究者グループは、中世の修道女に関する伝記的情報を収集する大規模な計画を公表した (McLaughlin 1987)。教会に関する進行中の別の領域としては、13世紀の教皇庁がある (Paravicini-Bagliani 1986)。

[p.195, 1.17- ]

中世後期の学校・大学における学生や教師にも、かなりの注目が寄せられてきた。1955年および1960年に、ステリング＝ミショー (S. Stelling-Michaud) は、13～14世紀のボローニャ (Bologna) 大学法学部におけるスイス人学生の身元確認を行い、経歴を追跡した。1982年にルナルディ (Ch. Renardy) は1140～1350年のリエージュ司教管区に居住した約800名の教師の伝記的リストを作成した。1971年から1985年にかけて出版された4巻の仕事で、リダーリックホフ (C. M. Ridderikhoff) とド・リダー＝シメンス (H. de Ridder-Symoens) はオルレアン (Orléans) 大学のドイツ同郷団学生の代理人 (procurator) の登録簿 (1444-1556年) を利用可能にし、この時期の1300名近くの学生の伝記的註記を補遺とした。中世のオクスフォードおよびケンブリッジの学生に関する伝記事典の編纂においてエムデン (A. B. Emden) が行った綿密な調査は、これらの大学の学生についてのプロソポグラフィ研究に新たな関心を引き起こした。1970年代に、ケンブリッジの研究者グループが、エムデンの二つの登録簿の索引をコンピュータ処理し、多数の新たな研究の基礎として役立っているが、新たなオクスフォード史の最初の数巻もそこに含まれている<sup>32</sup>。取り上げられた質問には、学生の社会的・地理的出自、俗人身分か修道士身分かのパーセンテージ、大学を出た後の経歴などが含まれている。中世末については、ファージ (J. Farge) による16世紀初頭のパリ大学における神学博士の伝記的登録簿 (1980年) と同じく宗教改革問題でこれらの神学博士がとった見解に関する研究 (1985年) が挙げられる。

プロソポグラフィ研究者は、都市住民にも当然照準を合わせており、中世都市民のなかの様々な職業的・社会的・政治的要素を確認しようとしてきた。別項目で既に学生、教師、統治役人、司教、司教座聖堂参事会員のような人々についての研究に多々言及してきたが、これらの者すべてが通常、都市共同体の一員だったのである。医学史への関心もまた、中世の医者に関する2冊の伝記事典の編纂に帰結し (Talbot 1965 ; Wickersheimer 1936)、これに基づいてごく最近に研究が始まっている (Jacquart 1979 ; Gottfried 1983, 1984)。ハーヴェイ (J. Harvey) は中世イングランドの建築家に関する伝記事典を編纂し (2d ed., 1979)、スラップ (S. Thrupp) は中世後期ロンドンの商人に関する重要なモノグラフを書いた (1948年)。中世後期の都市役人や都市評議会構成員、あるいはそれに類するものについては、かなり多数の短い研究が行われており (Wried 1986 ; Esch 1986 ; Hammer 1978)、また14世紀ドイツにおける都市叛乱の分析がなされてきた (Rots 1974, 1976)。レナルズ (S. Reynolds) は12世紀ロンドンにおける支配者のアイデンティティについての研究 (1972年) を行ったし、1341～1416年のフライブルク (スイス) における「市民の書」 (Bürgerbuch) のコンピュータ処理された版が、1979年に準備されていた (Bachler 1984を参照)。

[p.196, 1.17- ]

中世の農民は、プロソポグラフィ研究者に以下の点で問題を提起している。即ち、伝来する文字記録の性質とともにその余りに目立たない存在故に、膨大な数の農民は、ほとんど識別されえず、実際匿名の個人以上の者としてはめったに立ち現れてこない。それにもかかわらず、中世イングランドの農民を対象とする多くの歴史家は、近年、特定の時期の特定の村落で身

元を確認できる農民（通常、家の一員として）の伝記的リストを作成し、ランダムなサンプリングよりもむしろ人間集団の分析に基づいてその一般化を行おうとしている。このアプローチの事例としては、ラフティス（J. A. Raftis 1974, 1982）やブリトン（E. Britton 1977）、二人のデウィント（A. R. and E. B. DeWindt 1981）の仕事がある。例えば、デウィントは、1280年代のハンチンドンシャー（Huntingdonshire）から出た様々な法廷記録の1981年の版において、ハンチンドンシャー・ハンドレッドの伝記的登録簿を出版した。ただごく最近でも、農民のプロソポグラフィは依然としてまだほんの手始めの段階であるとの批判はなされている（Poos 1986）。

テーマや調査対象の人間集団がどのようなものであれ、プロソポグラフィ調査を実施して成功に至るかどうかは、歴史家が伝記的情報をできるだけ広範なオリジナル史料に求めて丹念に読み通すかどうかにかかっており、また、この伝記的情報を抽出するための技術ないしは方法を最高のレベルにまで洗練できるかどうかにかかっている。本章の残りの部分は、プロソポグラフィに最も役に立つオリジナル史料にかかわる議論、そしてその史料を活用するために展開されてきた方法について充てることにしたい。影響力をもった人々についての情報探索において、どのような形態の証拠も見落としてはならないが、すべてが等しく有用であるともいえない。現在まで、考古学的遺物はほとんど何も提供してくれず、目を見張るような新たな発見を除けば、今後も生産的ではありそうにない。碑銘の刻まれた墓石は、亡くなった日付、家の絆、社会的地位を確定するのに有益であるが、残念ながら13～14世紀以前のものほとんど伝来していない。実際、墓碑銘はかなりの数がヨーロッパの教会や博物館に残されているが、それについての刊行された報告は存在していてもローカルな歴史協会雑誌にどうしようもなく散在している。フランスの場合、これを改善するためポワティエ（Poitiers）の中世研究センターの研究者グループが、1974年に地域ベースで中世の碑文を収集し始め、これまで「中世フランス碑文集成」（*Corpus des inscriptions de la France médiévale*）<sup>33</sup>と題するシリーズで12巻の書物を刊行してきた。古銭学は硬貨の発見を通じて誰が特定の時期に貨幣を打造していたかを時に明らかにするので研究者の手助けとなるが、この種の証拠も、一貫して有用というには非常に断片的で不完全である。印章や紋章も家の由緒と社会的地位への手がかりとなるが、13世紀よりも前ではそうもならない。

[p.197, 1.15- ]

分量、明白さ、年代的範囲の点で、古銭学、印章学、紋章学がほとんどあるいは何も提供してくれない場合、書かれた記録がプロソポグラフィのための最も価値ある情報源であり続ける。叙述史料は、この種の研究にとっての価値としてはものによってかなりの差が出る。年代記や編年史はしばしばある地域の有力者の名を挙げているが、話に出てくる人物の同定にほとんど関心を示さない年代記作者もあれば、シャバンヌのアデマール（Adémar de Chabannes）のように、家の由緒の問題を強く意識した少数の者も存在した。アデマールの年代記には、例えば、当時の北アキテーヌ（Aquitaine）の貴族に関するかなり多くの独特な伝記や家系の情報が含まれている<sup>34</sup>。著者が時々身辺の友人や知人について言及するけれども、一般に聖人伝の文献は話題となった聖人や崇敬すべき人物についての背景情報を含んでいるに過ぎない。ある人物の友人や家の名を挙げるのに私信ほど明らかな文学形態はないが、歴史家が大いに助けられるほどには、ほとんど残されていない。文字記録のもう一つのカテゴリは、教会の記念祈禱設定簿（obituaries）のそれであり、つまり教会人がその名を記帳するのを適当と考え、追悼記念する



こととした人々の命日をリスト化したカレンダーである。これが作成されたのは、その人々の名声故か、彼らとその教会に何らかの縁故や結びつきをもっていたからである。幾分似通ったものとしては、「死者の書 [巻物]」(rotuli mortuorum)がある。それは修道士が選ばれた一定の修道院の間で廻していたもので、その中で彼らは自分たちの共同体の著名人や構成員の死亡を告げている<sup>35</sup>。8世紀から11世紀までを通して聖俗の膨大な名が記された別の史料として「記念書」(libri memoriales)、つまりイタリア、神聖ローマ帝国、イングランドの修道院にみられる記念の書物がある。書記は、修道院が接触をもち、祈禱が行われる個人や人間集団の名をこれらの書物に記載した。記念祈禱設定簿については、その中に名がある人々の身元を確認することはしばしば非常に難しい。前述したように、ミュンスター=フライブルク学派の研究者は、中世史におけるプロソポグラフィにとって、これらすべての記念文書が有用であることを見事に示してきたのである。

[p.198, 1.5- ]

前述した史料の長所がどのようなものであったとしても、証書 (charter)、ディプロマ (diploma)、ノティティア (notice)、令状 (writ) そして法廷記録のような特定の取引を記録するために作成された文書に、重要性において匹敵するものはない。蛮族の諸王国の時代には稀であったこれらの文書は、実際9~10世紀以後の西欧のあらゆる所に何十万と残され、プロソポグラフィ研究者にとって情報の宝庫となっている。主に12世紀以前の王や修道院、司教座教会によって、またその後世俗貴族によって、所有権の証明やそれ以外の権利の確定のために発給されたこれらの文書はいずれも、どこにあって1人から多くて100人までもの人間を取引の本人としてだけでなく証人として名を挙げている。証人は時に重要な人物の従者から出ているので、証人のリストは、誰が誰と結びついているかを決定し、故に特定の時期における特定の地域の様々な社会集団を引き出すのに無比の機会を与えてくれるのである。さらに、家の一員の行動を確認するため家の様々な構成員に助言を行ったり求めたりする慣習によって、証書はある時期の個人の家系について容易に入手できる最も良い情報源であり、それがなければ、中世のプロソポグラフィはほとんど不可能であろう。にもかかわらず、中世の証書から最大限の情報を引き出そうと努力する歴史家をいくつかの問題が妨げている。史料にアクセスできるか否かがその一つである。というのは、大量の証書、特に中世後期のものは、未刊行で広く散在しているため大部分が知られておらず、古文書館所蔵物としての目録化が進んでいなかったり、中味のない目録しか存在しなかったりする。例えばフランスでは、中央でも地方でもたった一つの古文書館すらも、所蔵する中世の証書をすべて掲載したリストをもっていないのである。それに文書集 (cartulary) や証書集成の刊本の多くは、その有用性を損なう深刻な欠陥がある。日付が確定されていない証書の日付確定を行ったり、偽文書を真正なものから区別したりする編集者による努力も不十分であり、その版に馴染みが薄い故に怪しむことのない歴史家には畏が仕掛けられているのである。多くの場合、編集者が証書に現れるすべての人間を包括的に索引化しようとしなないことは、史料に出てくる人間が、わざわざ1頁毎に目を通す研究者でなければ、実際、すべての人には失われていることを意味する。その他、特にオリジナルが残っておらず、後のコピーしかない場合、ある証書の刊本版は、利用可能な最良版とはいええないであろう。パリの国立図書館にある中世7~8世紀の証書の未刊行のコピーを通じて自らの道を切り拓いたドイツの歴史家ヴェルナーは、9~11世紀の証書の多くの証人リストを発見したが、それらは、19世紀に刊行された版からは除外されてしまっていたもので、かつての編集者が現



存する最良の版を捜し出すことに失敗したために生じたのである。これらの見失われた一握りの証人リストによって、ヴェルナーは、見事な探索作業でカロリング期アンジュー(Anjou)、メーン(Maine)、トゥレーヌ(Touraine)諸地方の貴族史について一般的な見解を大幅に見直したのである<sup>36</sup>。

[p.199, 1.9- ]

家の構成員であることは、生涯の後半では当てはまらなくとも、少なくとも人の経歴がどこで始まったかを決定するという点で通常極めて重要な役割を果たす。そのため、家と親族の同定はあらゆるプロソポグラフィの出発点である。ここでの「家」(Family)は広くとられており、限定された意味でのそれではない。一方で、家は生きているすべての親族・血縁を意味し、父母、祖父母、子のような直系親族と、伯叔母・伯叔父、従兄弟姉妹のような傍系親族のいずれをも指している。他方では、できるだけ遡った双方の家の祖先も念頭におかれている。通常、直系親族の構成員がある人間の生涯や経歴により大きな影響を及ぼしたが、経験的には、より遠い親族ないしは祖先、とりわけ権利において特に群を抜いた人間が、後の昇進、昇級、地位の変更を説明する手助けともなりうる。

近世・近代ヨーロッパ史における系図調査と比較した場合、中世の系図調査は相対的に少人数の家族以上のものになると、正確な拡大家族の樹系図を構築するほどには十分な証拠を欠いており、深刻な障壁が存在する。10世紀以前では、王権だけか場合によっては1、2の貴族家系が一定の正確さをもって知られるが、二世代以上のことになるとよくわからない。かなり多くの貴族家系は11～12世紀から継続的に辿ることができるが、はっきりしないことが、多くの他の家系図、特により下級の貴族の家系図には悩みの種となる。

多くの場合、系図学者は部分的な同定で満足しなければならず、両親の一方のみの出身がわかっていたり、「XはYの親戚であるが、今や知りえないような方法で」という程度ではっきりとは断定できなかったり、「Xが恐らくY家出身である」というようなことすらある。これ以上の進展はしばしば不可能であるが、これが必ずしも価値のない結論だという訳ではない。というのは、特定されない関係あるいは関係の可能性すらも、ほとんど常に、全く何も無いよりは知っている価値があるからである。

たいていの中世系図学の基礎は、数え切れないほどの素人や専門の歴史家によって築かれてきたが、彼らは、何世紀もの間、様々な個人的、社会的、そして学問的な理由でそのテーマに引き寄せられてきたのである。フランスでは、16～17世紀の多くの学者こそが、そのテーマを神話と事実の混じり合った物語から高度な信頼性をもった学問的な記述にまで高めてきたのである。彼らがこれを達成できたのは、中世の王家や貴族家門に関する家系情報を捜し求めて文書の山を潜り抜けてくることに並外れた労苦を厭わなかったからである。ラップ(Ph. Labbe)、バリユズ(E. Baluze)、アンセルム師(Père Anselme)、そしてとりわけサント＝マルト兄弟(Louis and Scévole Sainte-Marthe)のような人々の調査が非常に徹底して行われたので、フランス史にかかわるどんな系図学者もこれらの著作に当たることから始めなければならない。その他で、現代の系図学者にとって永続的な価値をもつ早い時期の作品には『キリスト教徒のフランス』(*Gallia Christiana*)がある。目的は家族史ではなくフランスの司教や修道院を調べることにあったけれども、それは、中世フランスの司教、修道院長、その他の高位聖職者に関する価値の高い伝記的情報を含み、系図学者に便宜を与えている。同じことは、イギリス、スペイン、イタリアのそれに類するものについてもいえる。

[p.200, 1.17 -]

現代の中世研究者は、これら先人に負っているものを認めながらも、徹底した検討を行った後にのみ、初期の系図学者の成果を受け入れることができる。これは、初期の研究者が見逃した文書にも現代の研究者が時にアクセスするという事実の当然の帰結である。加えて、不十分な学問的知識によって初期の著作家の仕事を損なう時もある。特に、専門の歴史家ではなく、自らの手で家族史を試みようとする専門的訓練を受けていない一般人の場合である<sup>37</sup>。

十分想像のつくことではあるが、個人名がある人を特定の家の一員として同定するための基本的な手段となった。これはしばしばあることだが、血縁関係のはっきりした証拠がない時にとりわけそうであった。しかしながら、共通の名がついていることから判断して、ある人が特定の家に属しているとする想定は、全く常に正当化される訳ではない。このことは、中世の命名慣習における一風変わった特徴に起因している。11世紀以降については、名を通じた身元確認の過程はそれ以前ほど複雑ではないが、それでも常に単純な問題でもない。この時以降、書記は、洗礼名（ファースト・ネーム）にセカンド・ネーム（付加名）を付すことによって、彼らが作成する証書に現れる人々を益々同定するようになっていった。人々は様々な由来でそのような付加名を選択したが、一般的なものは父祖の名をとったものか、あるいは、母祖の名をとったものか、つまり、父方か母方のいずれかの姓である。書記は、「*Geraldus filius Hugonis*」、*«Geraldus Hugonis»* または *«Geraldus de Hugoni»* のようにいくつかの書き方で表現したが、すべて同じことを意味した。つまり、「フーゴー（ユーフ）の息子ゲラルドゥス（ジェラルド）」である。父祖の名からとった姓ならば、明らかに系図学者の問題は解決したけれども、貴族がそのような付加名（姓）をめたにとらなかったという事実を除いての話になる。その代わりに貴族は主な居住地か城の名で知られることを好んだ。ポワトゥー（Poitou）の城主身分家系のリュジニャン（Lusignan）領主は、「*Hugo de Liziniaco*」、*«Hugo Liziniacensis»*、*«Hugo dominus de Lizianiaco»* と様々な呼ばれ方をした。躊躇することなく、他には同定のしようのないどんなリュジニャンのフーゴーもその家の構成員であると考えられるが、これがリュジニャンという付加名をとる者にだけ当てはまるという訳ではない。その他の家系は、村落、城、都市の名を付加名に充てるかもしれないし、問題となる共同体の規模が大きくなればなるほど、こうしたことが行われる機会は増大する。このような状況下で、ファースト・ネーム（名）が身元確認の鍵となるのである。

[p.201, 1.9-]

ほとんどの場合、付加名が身元確認の手助けになるけれども、これは必ずそうである訳でもない。特殊ではあるが、同じ付加名ではないことで、当然同じ家の構成員ではないということにはならないのである。なぜなら、付加名は当初世襲的な家名ではなかったからである。人々は時に付加名を変え、場合によっては一生に一度以上そうしたのである。貴族の場合、息子が父親とは異なる村落や城を獲得し、自分の付加名にその地名をとった時に、こういうことは起こりえた。もう一度いうが、ファースト・ネームが、身元確認の決定的な要素なのである。

単一の名しかもたないことがゲルマン人の慣習であった11世紀以前に遡って調査することになると、困難は増大するし、結論の信頼性は低くなる。だから、同じ名をもつ異なった人々を識別すること、例えば、同じ地域から三つないしはそれ以上同時代の証書に現れるウィリアムが同一人物なのか、あるいは2、3の別人なのかを決定することは、不可能でなくともしばしば困難なのである。何らか他の同定できるような特徴を基礎にして識別できるぐらい十分に同じ

ような名の個人を知っているごく一部の人が、このような状況から生じるディレンマを解決することができる。地域毎や、さらに同じ地域内ですら、同じ名の綴り方に驚くべき変化があるのもまた、どうすることもできない。11世紀以前のコンラッド (Conrad) の名にみられる読み方は、バイエルン (Bayern) とシュヴァーベン (Schwaben) での「Chonradus」、  
 «Choanradus»、«Chuanradus»、«Chuonradus»、«Cuonradus»、«Honratus»から、イタリアの  
 «Guneradus」、ネウストリア (Neustria) の«Conradus」、ブルグント (Burgundia) での  
 «Cohunradus»、«Cunrhadus»、«Gundradus»、«Gohunttradus»にまで及ぶのである<sup>38</sup>。一部の  
 人々が洗礼名とは全く異なる渾名をもつ傾向も研究者の手助けにはならない。こうして、クリュ  
 ニィのある証書には、文書の始めでリコアラ (Richoara) と呼ばれた女性が、最後にはデカ (Deca)  
 として名が列ねられている<sup>39</sup>。

これらすべての複雑な問題を考慮すると、名の同定が家族関係の蓋然性を確定する際に極めて重要な要因であり、紀元千年頃の文書に初めて現れる家系の事例では特にそうなのである。中世前期フランク王国の貴族を対象とする歴史家が直面する極めてよく知られた難問の一つが、11～12世紀に傑出した家系の問題で、付加名から10世紀末まで遡れるのだが、その痕跡は、初期の単一名の時期に入って失われてしまうのである。マルク・ブロックは、家系の最初に知られる構成員がその創始者か、あるいは少なくともその人物が自分の名をとった城の支配を通じて、その家系を卓越した地位にまで押し上げた人物だと想定した<sup>40</sup>。長年の間、この見解は広く受容されたが、その後1960年代にフランスとベルギーの貴族に関する詳細なモノグラフによって、11世紀の多くの重要な家門は実際さらに遡って痕跡を見出せるということ、そして、事実上はカロリング期の著名な祖先から出たものであったということが示され、この見解に異論が唱えられた<sup>41</sup>。城の名から付加名をとった最初の家長は、創始者ではなく、ただその富と権力が固定され防備化された場所の周りに集中するようになったある時期にその家を統括した最初の人物だったのである。「主要名」(leading names)、つまり11～12世紀にその家門によって好んで用いられた名は、ドイツ語で「ライトナーメン」(Leitnamen) と呼ばれるが、付加名のみられない早い時期の祖先を同定する鍵となったのである。この鍵となる名を何にするか決めた後、研究者は、その地域や近隣の地域で何世代か前にその名の出現を捜し求めた。期待された名の発見はしばしば予想外の場所でみられ、それ自体家族関係の存在を示さなかったけれども、十分そうであるか、あるいはしばしば恐らくそうである可能性を証明し、後に別の証拠によって裏づけられたのである。ベリィ (Berry) の城主家門デオル (Déols) 領主の由緒に関するヴォラシュによるモノグラフは、この手続きを立証している。ヴォラシュは、900年頃に初めて知られるデオル領主エボ (Ebbo) の祖先を見出すことができず、アキテーヌ北部にある修道院の証書を参照したが、その名がこの家に共通する他の二つの名と結びついて、100マイル [約160km] 以上離れたポワティエ周辺の地域で9世紀後半にしばしばみられることを確かめた。ヴォラシュはエボが系統を引くであろう特定の家門を突き止めることはできなかったが、ポワティエ付近に一つがみられる公算を強め、そのような仮説は、ポワトゥー伯でなおかつポワティエに主要居館を有したアキテーヌ公をエボが主君と認めていた事実と符合するのである<sup>42</sup>。

[p.202, 133-]

他の形態の証拠も系図学者にはしばしば手助けとなる。というのも、系図学者は、個人名の同定を通じて異なる世代の二つの人間集団の間に家族関係の蓋然性を示してきたが、その決定

的な証拠を欠いているからである。同じ場所での出生や居住が関係の可能性を支持するのに、さらにコメントする必要はなかろう。隣接した不動産の所有、あるいは同じ村落での不動産所有もまた、二つの人間集団あるいは家が親類ではないかと大いに考えさせられる。なぜなら、元々これは、両親の没後に相続人の間で分割された唯一の地所であったかもしれないからである。正確には同じことは公職保有にも妥当する。10世紀のフランスで、封と同様に世襲化する傾向にあった称号 (title) とともに、すぐに次のように考えるだろう。つまり、確証はないけれども、特定の役人はいずれもその公職の前保有者と関係があったのではないかということである。11世紀に聖職者の婚姻が禁じられた後、貴族家門は、一つの称号を伯叔父から甥へと何世代も続けて譲り渡すよう適応して、教会役職に足場を維持することができた。多くの主な家門と、それが創立したり多大な寄進をしたりした最良の修道院とを結びつける特別の絆もまた、家を同定する一要素として有用である。こうして、特定の修道院に対する情実が、ある人物をそれ以前の世代に主な後援者であった人々と結びつけるのである。また、特定の修道院での埋葬を要求したり、恐らく年老いてからそこで修道頭巾を被ったりするような人物が、それ以前にそこで埋葬された同じ地位の他人と関係があるのではないかとも考えるだろう。

[p.203, 1.15- ]

最近のドイツの歴史家の大きな功績は、次のようなことを示したことである。即ち、家族関係についてのあらゆる指標、つまり名前、財産、公職、好んだ修道院等々を体系的に調和させたこと、また、系図調査の技術を高レベルにまで洗練し、これまで不可能だと考えられていた成功へと導いたことである。この一つの事例がアンジュー伯家の起源に関するヴェルナーのモノグラフであった<sup>43</sup>。最初に知られる伯フルク (赤伯) (Fulk the Red, 886-942) の家系は単純に同定されえないとするアルファン (Louis Halphen) の判断を受け入れずに、ヴェルナーは、パリの国立図書館で新しくより完全な証書のコピーを捜し出した上に、可能性のある祖先をアルファンよりも遠くに捜すことで、この問題を再検討し、解決した。世代を超えて連続する財産の保有によって裏づけられた名から明らかになったのは、フルクの父が9世紀中頃にオルレアン地域にいたフランクの家系に属していたこと、彼の母がルイ敬虔帝の執事 (sénéchal) でシャルル禿頭王の最も有力な助言者の一人であったアダラル (Adalard) の親類だったことを示したのである。封建期の著名な伯家の一つがカロリング期の高級貴族から出ており、自力で台頭してきたのではなかったことを証明することで、ヴェルナーはカロリング後期史全体に重要な功績を残し、系図学がどうしたら通常の家族史よりもはるかに重要な成果を導き出しうるかを証明した。

名がはっきりしないことは、プロソポグラフィにとってのもう一つのより基本的な問題、即ち、中世の貴族家門の構造そのものがはっきりわかっていないことと密接に絡んでいる。中世の文字記録は、我々が «clan»、«kindred»、«lineage»、«family» [いずれも親族、家集団] と訳すラテン語を用いながら常に家単位について語っているが、これらの用語の正確な意味は今日でもしばしばはっきりとわからないままなのである。だから、氏族 (clan) あるいは血族集団 (group of kinsmen) たる「親族」 (parentela) にかかわって疑問が生じてくる。これにどれだけのどのような親類が含まれていたか、構成員を結びつける関係にはどのような意味があったか。また、それは構成員にどのような義務と責任を課し、どのような特権を与えたか。それはどのような傍系親族を集めたものか、そして姻戚関係つまり婚姻による親類についてはどうであったか、という疑問である<sup>44</sup>。別の疑問は、人々が自分の祖先を迎える方法にかかわるもの



である。10世紀以後、それは明らかに男系によってなされたが、最近の研究では中世前期において人々が女系・男系のいずれを通して血統を判断したということが証明されてきた。このテーマを他の誰よりも徹底的に研究してきたドイツの歴史家シュミットは、貴族家門の構造が10～11世紀の特定されない年代に根本的な変化を経験したこと、そして、貴族家門による「領域化」(territorialization)こそが中世後期における男系志向での血統親族の発展を説明すること、を論じたのである<sup>46</sup>。城によって支配される世襲地に定着し、もはや地位や貫禄を王や領域君主からの恩恵に頼らなくなると、家はその所有物を賢明に維持・管理し、相続人に無傷のまま譲り渡すために、益々その男性の家長に依存するようになった。家政、特に戦争の問題で男系家長の役割が重要になればなるほど、その子は益々家の男系家長の側を通して血統を辿るようになり、その最終的な結果が11世紀以後の貴族社会で非常によく知られる男系が支配的な単系出自集団(lineage)なのである。シュミットの見解の妥当性がどうであれ、この見解がこれまで多くの者を納得させてきたのであり、明らかにプロソポグラフィ研究者にとっては、中世貴族家門がどのようなものであり、それがその個々の構成員に対してどのような種類の影響力や支配力を行使したか、ということをより意識することが有用なのである<sup>46</sup>。

[p.204, 1.26- ]

家の由緒についての系図学的問題に当初から深くかかわっていたプロソポグラフィは、次に個人の生涯と経歴の研究へと移行していく。大半の人々の幼少年期や思春期のことは、通常全く知られないままである。もっとも、少年が、騎士修行の間に慣習的に従騎士として過ごす何年かを、どこで、誰と過ごしたかということが時折言及されて明らかになることはある<sup>47</sup>。そのような見習い期間を経て形成された友人・知人関係は、多分、後の交際や同盟、または鼯鼠の手がかりを含むことになろう。同様に、教育を受けた者の場合、その指導者や学んだ学校についての言及が、その人物の知人の輪を明らかにするかもしれない。騎士身分になると、多くの良家の若者が、冒険、馬上槍試合、そして時に妻を求めて旅先で過ごす何年かは、さらに知り合う人間集団を広げ、その人々と時には永続的な友情の絆を形成することにもなった<sup>48</sup>。人が結婚する方法や選ばれる相手のタイプが、その社会的立場を知る貴重な目印となることがある。貴族の結婚は双方の関係者に利益をもたらす一種のビジネス契約だったので、人々は自分たちと社会的に同等の者と結婚することで、経済的かつ社会的な信用を落とすことを避ける傾向にあると、長く考えられてきた。しかしながら、最近の研究は男性が自分より高い地位にある家と結婚を行う事例の証拠を少なからず見出してきた<sup>49</sup>。結婚についての歴史家の対象は、妻とその家そしてその地位を確認することである。即ち、彼女の父がどのような種類の公職を保有しているか、また、この父親がどれくらいの財産を所有しているか、さらに、彼女の家はどこでどのような重要人物と結びついているか、彼女の家の地位にかかわるその他すべての同様な指標が重要なのである。

[p.205, 1.10- ]

貴族の結婚から生まれた子を知れば、その両親の伝記を知るのに非常に役に立つ。両親の社会的な期待や地位については、教会でも世俗の官職でも、彼らが我が子のために計画した経歴から何かがわかることもある。もちろん、同じことは、彼らが我が子のために選んだり、承認したりした配偶者にも当てはまる。

結婚はまた、多くの若者が相続権や家産の取り分を手に入れる機会であった。家の地位は誕生とともに子に受け継がれたが、相続こそが子に彼らと同等の者たちのスタイルで生きる手段



を与えたのであった。家産の性質や規模は、実際、社会的地位の優れた目印となる。特に、その両親や祖先に関する情報が失なわれていたり不完全であったりする場合にそうである。結果的に、貴族の伝記の極めて重要な部分は、ドイツの歴史家が「占有史」(*Besitzgeschichte*)と呼ぶもの、つまり、個人の相続についての説明であり、可能であればその規模、場所、構成を確定したりする。12～13世紀以前については個人の遺言書がめったに残っていないので、歴史家は非常にしばしば断片的な情報を処理しなければならない。そして、個人の財産に関する唯一の手がかりは、その人物が教会に寄進するために財産の一部を手放したときに得られるのである。しかし、たまたま記録されることになった寄進ですら、全体の性格にかかわる貴重なヒントをしばしば含んでいる。例えば、気前のよい贈与はそれよりもはるかに大きな所有財産が蓄えられていることを示唆する。というのは、重要な家門は、通常、自らを無一物にして自分たちの地位を危険に晒すことはしなかったからである。こうして膨大な地所は、高い地位の家であることを仄めかし、逆にいえば、少額財産の寄進は普通、よりたいしたことのない立場であることを意味する。もっとも、これは誤ることのない規準という訳ではない。なぜなら、有力者は自分たちの土地を過度に分割するのを避けるため時に贈与を制限したからである。同様に、一つの伯領全体あるいはそれ以上の広大な領域に所有財産が散在していれば、その所有者は恐らく在地のレベルを超えた重要人物であろう。他方、単一の地区(district)に集中していれば、普通は逆のことを意味している。さらに、世襲財産の一つないしはそれ以上の城が含まれると、その所有者がより高級な貴族の一員であるのは明らかである。教区教会と十分の一税の所有権は別の収入源となったが、あらゆるレベルの貴族はそれらを保持していたので、より高い地位か、低い地位かの規準としてそれらを利用することは難しい。同じことは、土地からの収入とは逆に、農民に対する権利から得られる収入にも当てはまる。これには、労役、タリッジ(領主賦課租)、結婚税、死亡税、軍役と、特に裁判の諸権利が含まれた。ある期間における土地の規模の変化は興味深い。というのも、それらが地位の変化を示すかもしれないからである。もしある人物が劇的にその所有財産を増やすとすれば、疑問は、どのように、どんな状況下で、購入によってか、贈与によってか、もし贈与ならば、誰から、どうしてか、ということになる。同じ疑問は、反対の場合、つまり、財産が規模ないしは重要性において減少した人物の場合にも当てはまるのである。

[p.206, 1.13- ]

ある人物の成人後の人生は、その人物の活動を観察したり、同時代の出来事からその人物の社会的な地位や影響力を推定したりする極めて多くの機会を提供してくれる。調査の中心には、世俗行政ないしは教会で保有された公職の研究があり、行使された役割についても検討される。その人物の公職やそれに付随するもの——つまり、この公職が与えた権威、威信、収入——を知れば、その保有者の地位についてかなりのことがわかる。ある場合には、文書は、権威を行使し、決定を下し、指示を発し、命令を与える行為の中で個人を描写する。その他多くの場合では、問題となる公職についての一般的知識からこれらを推測しなければならない。

誰かがある公職を保有したという証拠は、ほとんど常に文書上で授受される称号からきている。称号や、その使用を左右する慣習、特に使用上の変化を丹念に研究することで、公職を保有する人々の地位に光が当てられるだろう。確かに、この種の証拠を解釈する際には、十分な識別がなされなければならない。というのは、異なる文書局(書記局)——ローマ教皇、王、司教、伯、領主、修道院のいずれの文書局でも——の書記は、時に同じ用語にわずかに異なっ

た意味を与えているからである。また、それを使用したのが誰であろうと、鍵となる称号である「*dominus*」は、数多くの異なった意味をもちえたのである。文脈や、ある人物の名の前か後かというその言葉の位置に応じて、「*dominus*」は、そう呼ばれる者が封臣や農民を従わせる領主であったり、城主つまりある城の指揮者であったり、夫であったり、聖職者あるいは修道士であったり、伯、司教、城主、修道院長にかかわらず単に貴族の構成員であったりと様々な対象を指すのである。いったんこれらの変化が認識されると、この称号の使用についての研究は様々なことを明らかにしてくれる。例えば、9世紀から11世紀中頃までのポワトゥーでは、伯、司教、修道院長のみがその公職の称号に加えて「*dominus*」の称号をとり、「*dominus Guillelmus comes*」〔伯ギヨーム殿〕という風に表された。さらに、1050年以後、城主として確認される新たな人間集団が、この称号を使用し始めた。そして、最終的に1100年頃、騎士(*milites*)がそれを自分たちに当てはめた。この称号の広がりや大衆化に至ったことは、この後者の二つの人間集団〔城主・騎士〕が社会的威信を増大させたことを示唆しており、実際の、他の証拠が明らかにそのような結論を裏づけているのである<sup>90</sup>。

[p.207, 1.5- ]

個人や公職の称号に加え、中世の書記は別のカテゴリの用語を用いて、仕事(職業)、居住場所、法的地位、領主への従属、あるいは、ある種の個人的特徴を基礎に人々を選別した。貴族史を対象とする歴史家は、必ずこの最後のカテゴリのいくつかの用語、とりわけ「*vir illuster, clarus, nobilis, venerabilis*」を頼りに、貴族の一員かどうかの身元確認を行ってきた。しかしまた、このような用語を判断するには注意が必要である。ポワトゥーにおける何千もの個人や公職の称号、また叙述的用語の統計的研究は、書記が9世紀から12世紀までの間に「*vir nobilis*」という用語をめったに使用せず、結局世に知られていない人々を別な風に差し示しただけで、副伯、司教、修道院長、城主を示した訳でも決してなかった<sup>91</sup>。この見解に拠れば、「*nobilis vir*」が、これまで考えられてきたような貴族とそれ以外のすべての者とを区別する用語ではなく、地位が曖昧な人々を同定する用語なのであるとする結論は避け難い。なぜなら、彼らの身元確認が自動的に同時代のすべての者に知られている訳でもなかったからである。要するに個人の称号や似通ったその他の用語の研究は、プロソポグラフィ調査の極めて重要な部分であり、極めて細心の注意に値するのである。この研究にはなしうる限りでの広範なアプローチを要する。というのも、たった今引用したばかりのいくつかの事例から明らかのように、文脈を外れて個々の事例を観察すると、結局はその当時の意味を見失うことになるからである。

ある個人がどのように公職を得たかは、根本的な関心にかかわるものである。ある者はそれを相続したであろうし、あるいは結婚を通じて得たであろうし、提供したサービスの謝礼として授けられた恩恵によるものであっただろう。ある人がその公職を家で初めて保有した者であれば、常にそれは先述した後の二つのカテゴリの一方〔結婚かサービスの代償〕に落ち着くのは明らかで、地位・身分の向上を意味していたであろう。場合によって、同時代史料は、誰某がその公職に就いたのは某人物のお蔭であったとはっきりと述べていたりもするが、大半ではなくとも多くの事例で、昇進を導いた状況とともにこの点は曖昧なままである。これらの条件のもと、ある特定の個人が新たな公職をどのように獲得したかを説明するのに最大の期待を抱かせるアプローチは、この人物にそのような公職を与えられる立場にいる人々、特にその地域や地方における指導的人物と、彼がどのような接触やつながりをもっていったかを見定めようす

るものである。公や伯など最高級の貴族の場合にはそのような立場の人間は王であり、それよりも低い身分の者の場合、地方や伯領の内部の有力者を意味することになる。

ある人物の公職の由来だけでなく、彼の全体としての社会的立場を知るのに最良の目印となるものは、彼が結びついた人々の中に見出される。結びつきのある人々の高・中・低の各レベルの貴族としての地位が、その人物自体の尺度となる。というのは、反対の証拠がない限り、その人物は恐らく彼が規則的に接触をもつ人々と同じ地位にあると普通は考えるからである。社会的地位以外の多くの要因もまた、どうして誰かがある人々と交際していたかを説明し、そうして彼の彼らとの関係を明らかにするのに役立つであろう。しかし、最終的な分析では、すべてがある種の共通の関心ないしは絆に還元されるだろう。既に言及した通り、証書の証人リストは中世の長い時期に及んでこのタイプの最良の情報源なのである。

[p.208, 1.11- ]

何らか特定の人間集団とともに、ある個人の地位や重要性に関するかなりの正確なところは、いくつかのタイプの情報から推測されるだろう。第一に、公職だけがその保有者にある地位を付与する。なぜなら、一部の者は自動的に他の者よりも高い地位にあったからで、例えば、カロリング期の伯代理 (vicar) に対して副伯は上位にあったのがそれにあたる。地位にかかわる別の指標としては、人々が証人リストでとる順序がある。このテーマは広く研究がなされなかったけれども、多くの事例で、証人の順序は、彼らが構成員となっている特定の集会における地位と合致したと信じるしかりとした理由が存在する。こうして、ラッセル (J. C. Russell) は、イングランド王ジョンの証書に署名を行った聖俗貴族の間に、明らかに一貫した優先順位を見出した<sup>52</sup>。同時期や、あるいは異なる時期に、より下層の人々の法廷も、同じように一貫性のある同種の冒頭定式 (protocol) を遵守していたかどうかを検討されるべきである。複数の同じ証人が絶えず位置を変化させれば、先の結論が当てはまらないことを示すだろうが、単一の個人が絶えず位置を変化させる場合には、地位の上昇や下降を指しているかもしれないのである。

ある人物が現れる証書の中での彼の役割 (機能) も、彼についてかなりのことを語ってくれる。極めて単純な言葉で置き換えれば、人々は、他人の行動の傍観者ないしは証人として受動的に参加したか、贈与者、売り手、買い手、あるいは、ある争議の原告や被告のように、多くの立場の一つから取引の本人として積極的に参加したか、いずれかなのである。一見すると、取引を始めた人々は単に署名しただけの人々を見劣りさせるように思われるが、この結論は、二つの変数——即ち、一つは取引の目的と重要性、そしてもう一つはその他の居合わせた人々の資質や地位——に依存している。こうして、著名人の法行為の証人となったただで、その人を普通の村人の面前で寄進を行った者よりも高い地位にある者として分類できるのである。同様に、小さな畑や2、3デナリウスの年定期金のような少額の寄進は、寄進者が限られた資産しかもたず、恐らく低い地位の者だったのではないかと思わせるだろう。他方、膨大な土地を譲与したり、修道院を創建したり、あるいはそれに類似した行いをする者は、著名人が彼の法行為の証人になろうがなるまいが、上流の家門の一員と見做されるに違いない。

[p.209, 1.4- ]

人の移動・接触・所有の地理的な範囲・分布についての証拠も、その人の社会的重要性を決定するのに貢献する。たった一つ小さな地区に限られた所有しかなく、たとえあったにしてもその地区を越えて旅行もしない人物は、地方全体あるいはそれ以上に広がった所有物を持ち、

自宅から長距離の旅行を強いられる人物とは、他のことでは同等であっても、地位の点は比較にならない。ある人物が証書に頻繁に現れることも、誤ることがない訳ではないが、その地位をはかる良い指標となるように思われる。最も威信があり、また権力もある人々は一般に、しばしば他の者以上に姿を現すものであり、逆に、めったに姿を現さないことは、通常社会的に取るに足らない身分であることを意味している。

前述した多くの証書分析のアプローチから、長期に及ぶ単一の家系に関する大量の情報をもたらされるに至ったが、そうした顕著な事例が、ルマリニエ (J. F. Lemarignier) による11世紀カペ朝の王についての研究である<sup>33</sup>。彼は、個人の称号、証人リスト、取引の対象・範囲から抽出されるどのような証拠が集まって、(987年から1077年までの治世毎、ほとんど10年毎の)初期カペ朝における権威と威信の衰退を史料的に裏づけたかを明示した。それも年代記の証言でなしうるよりもはるかに徹底的で正確に例証してみせたのである。この90年間に、国王証書は、益々重要でない問題ばかりを取り扱うようになり、王の動きや活動の領域的な範囲は益々限られたものになり、あるフランス王などは世紀半ばまでめったにロワール河を越えて南には旅をしなかったのである。同時に、王たちは、王文書(ディプロマ)に王の署名を付すだけという伝統的な方法を徐々に放棄し、証人として王の従者の署名(*signa*)を求め始めたのである。つまり、旧来の慣習が王の法行為に効力を与えるのにもはや十分ではなくなった明らかな徴候であり、同様に王の威信が衰退している徴候だったのである。王とともに現れた人々の社会的地位もずっと下降し、ついには最も高貴な者だけが王の謁見を認められた初期とは大いに異なり、普通の騎士や都市民さえも含まれるようになったのである。ルマリニエがカペ朝王の研究で成し遂げたことは、確実に貴族一般の幅広いスケールで試みることができよう。そして、貴族一般についての証書が相対的に少ないことだけが、幾分その成功を制限することにもなるう。

以上のサーヴェイの結論として、現時点での中世史におけるプロソポグラフィ研究の意義を見定めておくことが適切であろう。プロソポグラフィのアプローチが過去15年における中世研究で異例の進歩をなし、広く異なる領域で常により多くの研究者に訴えかけてきたことは、ほとんど疑う余地はない。本稿の初版(1976年)の文献目録を現在のものと比較すれば、それは明らかである。以前のは過去15年における動向と成果を反映した新たなタイトルですっかり入れ替えられ、完全に改訂されなければならなかった。またそれはかなり包括的であることを望みえたのであるが、今や本稿にとっては話にならず、また今回の文献目録も、より十分な範囲を押さえられた他の著作や文献目録への手引きとなる程度を目指しているに過ぎない。中世研究のほとんどすべての主要分野で新たなモノグラフと伝記的リストがまさに氾濫し、この変化をもたらされた。こうしてプロソポグラフィによるアプローチへの強い関心の広がり証が証明されている。多くの新たな計画が現在進行中であり、性質としては広い視野をもった集団的なものも僅かにあるが、たいていはより小規模に個人によって実施されている。一部では高度に生産的であり、特に顕著なのがミュンスター学派のものであるが、その他の多くはよりゆっくりと作業を行っている。というのも特定の人間集団に関する伝記的情報を集めることには相当の時間消費が要求されるからである。歴史家は、自分たちの作業をよりよく調整するために組織化し始めたのであり、1980年代初頭に国際研究集会を目の当たりにし、1980年には新たな学術誌が創刊された。新たな研究は必然的に非常に多くの異なる雑誌や書物に書かれて散在し

ているが、まさにその分量の故に、新たな出版に遅れまいとするプロソポグラフィ研究者が直面する困難は増大しており、今以上に効果的な文献把握を要するところまできている。しかし、これは些細な技術的問題である。これまで述べてきた研究自体が十分示しているように、プロソポグラフィのアプローチによって、中世社会のほとんどすべての異なる社会集団や職能集団がよりよく理解されるようになったのであり、恐らく将来もそうあり続けるであろう。

略記・略号<sup>54</sup>

AESC	<i>Annales, Economies, Sociétés, Civilisations.</i>
CNRS	Centre National de la Recherche Scientifique. Paris.
Francia	<i>Francia: Forschungen zur Westeuropäischen Geschichte.</i> 1973-. Paris.
FMH	<i>Frühmittelalterliche Studien.</i> 1967-. Münster.
HMO	<i>L'histoire médiévale et les ordinateurs.</i> 1981. Rapports d'une Table Ronde internationale. Documentations et recherches publiées par l'Institut Historique Allemand de Paris. Edited by K. F. Werner. Munich: K. G. Saur.
IP	<i>Informatique et Prosopographie.</i> 1985. Table Ronde CNRS. Edited by H. Millet. Paris: CNRS.
MLH	<i>Medieval Lives and the Historian: Studies in Medieval Prosopography.</i> 1986. Proceedings of the 1st International Interdisciplinary Conference on Medieval Prosopography, University of Bielefeld, 3-5 December, 1982. Kalamazoo: Medieval Institute Publications.
MI	<i>Medieval Prosopography.</i> 1980-. Kalamazoo.
PGEM	<i>Prosopographie et Genèse de l'Etat moderne.</i> 1986. Edited by Fr. Autrand. Paris: Ecole Normale Supérieure de jeunes filles.
PLRE	A. H. M. Jones, J. R. Martindale, and J. Morris. <i>The Prosopography of the Later Roman Empire.</i> 1971-1992. Cambridge: Cambridge UP. Vol. 1, 1971. Vol. 2, 1980. *Vol. 3, 1992.
PS	<i>Prosopographie als Sozialgeschichte?</i> 1978. Methoden personengeschichtlicher Erforschung des Mittelalters. Sektionsbeiträge zum 32. Deutschen Historikertag, Hamburg, 1978. Munich: W. Fink.

## 文献目録

- Althoff, G. 1978. *Das Necrolog von Borghorst* (Veröffentlichungen der Historischen Kommission für Westfalen 40 = Westfälische Gedenkbücher und Nekrologien 1). Edition und Untersuchung. Münster: Aschendorff.
- Althoff, G. 1984. *Adels- und Königsfamilien im Spiegel ihrer Memorialüberlieferung. Studien zum Totengedenken der Billunger und Ottonen.* Munich: W. Fink.
- Althoff, G. 1986. "Unerforschte Quellen aus Quellenarmer Zeit, IV. Zur Verflechtung der Führungsschichten in den Gedenkquellen des frühen 10. Jahrhunderts." In *MLH*, 37-71.
- Anselme de Saint-Marie. 1967. *Histoire généalogique et chronologique de la maison royale de France, des pairs, grands officiers de la couronne...* New York: Johnson Reprint [3rd ed., 9 vols., Paris, 1726-33].
- Autrand, Fr. 1981. *Naissance d'un grand corps de l'Etat: Les gens du Parlement de Paris, 1345-1454.*



- Paris: Publ. de la Sorbonne.
- Bachler, H. 1984. "The Use of a Relational Data Base Model for the Implementation of an Information System on the Medieval City of Freiburg." In *Computer Applications to Medieval Studies*, 89-106. Edited by A. Gilmour-Bryson. Kalamazoo: Medieval Institute Publications.
- Beech, G. 1971. "Personal Titles and Social Classes in Medieval France from the 9th to the 12th Century." Paper delivered at the American Historical Association Convention, Dec. 30, 1971, New York.
- Beech, G. 1976. "Prosopography". in *Medieval Studies: An Introduction*, 151-84. Edited by J. M. Powell. Syracuse UP.
- Bloch, M. 1961. *Feudal Society*, 2 vols. Trans. by L. A. Manyon. Chicago: Univ. of Chicago Press [1st original ed., Paris, 1939-40].
- Bouchard, C. 1986. "Family Structure and Family Consciousness among the Aristocracy in the 9th-11th Centuries." *Francia* 14: 639-58.
- Britton E. 1977. *The Community of the Vill: A Study in the History of the Family and Village Life in 14th Century England*. Toronto: Macmillan of Canada.
- Bulst, N. 1984. "Deputies at the French Estates General of 1468 and 1484. A Prosopographical Approach." *MP* 5(1): 65-80.
- Bulst, N. 1986. "Zum Gegenstand und zur Methode von Prosopographie." In *MLH*, 1-16.
- Burson, M. C. 1982. "Emden's Registers and the Prosopography of the Medieval English Universities." *MP* 3(2): 35-51.
- Chandler, V., C. Newman, and D. Spear. 1984. "A Proposal for a Dictionary of Anglo-Norman Biography." *MP* 5(2): 33-40.
- Chastagnol, A. 1970. "La prosopographie, méthode de recherche sur l'histoire du Bas-Empire." *AESC* 25: 1229-35.
- Chaume, M. 1947. *Recherches d'histoire chrétienne et médiévale: Mélanges publiés à la mémoire de l'historien avec une biographie*. Dijon: Académie des Sciences, Arts et Belles-Lettres.
- Clark, L., and C. Rawcliffe. 1983. "A History of Parliament, 1386-1421: A Progress Report." *MP* 4(2): 9-42.
- Claude, D. 1978. "Prosopographie des Spanischen Suenenreiches." *Prosopographia II. Francia* 6: 647-76.
- Delisle, L. 1866. *Rouleaux des morts du IXe au XVe siècle*. Paris: Ve J. Renouard.
- Demurger, A. 1978. "Guerre civile et changements du personnel administratif dans le royaume de France de 1400-18: L'exemple des baillis et sénéchaux." *Francia* 6: 151-298.
- Denton, J. H., and J. P. Dooley. 1987. *Representatives of the Lower Clergy in Parliament, 1295-1340*. Woodbridge: Boydell Press.
- DeWindt, A. R., and E. B. DeWindt. 1974. *Royal Justice and the Medieval English Countryside*. 2 vols. Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies.
- Duby, G. 1964. "Au XIIe siècle: Les jeunes dans la société aristocratique dans la France du Nord-Ouest." *AESC* 19: 835-47.
- \*Ebling, H., 1974. *Prosopographie der Amtsträger des Merowingerreiches: von Chlothar II. (613) bis Karl Martell (714)*. Munich: W. Fink.
- Ebling, H., J. Harnut, and G. Kampers. 1980. "Nomen et Gens. Untersuchungen zu den Führungsschichten des Francken-, Langobarden- und Westgotenreiches im 6. und 7. Jahrhundert." *Prosopographica III. Francia* 8: 687-745.
- Emden, A. B. 1957-59. *A Biographical Dictionary of Members of the University of Oxford from A.D. 1176-1500*. 3 vols. Oxford: Clarendon Press.

- Emden, A. B. 1963. *A Biographical Register of the University of Cambridge to 1500*. Cambridge: Cambridge UP.
- Esch, A. 1986. "Zur Prosopographie von Führungsgruppen im spätmittelalterlichen Rom." In *MLH*, 291-301.
- Evans, R. 1986. "The Analysis by Computer of A. B. Emden's Biographical Registers of the Universities of Oxford and Cambridge." In *MLH*, 381-94.
- Evergates, T. 1975. *Feudal Society in the Bailliage of Troyes under the Counts of Champagne, 1152-1284*. Baltimore: Johns Hopkins UP.
- Fanning, S. 1981. "A Review of Lombard Prosopography." *MP* 2(1): 13-33.
- Farge, J. K. 1980. *Biographical Register of Paris Doctors of Theology, 1500-1536*. Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies.
- Farge, J. K. 1985. *Orthodoxy and Reform in Early Reformation France: the Faculty of Theology, 1500-1543*. Leiden: E. J. Brill.
- Fichtenau, H. 1979. "Die Reihung der Zeugen in Urkunden des frühen Mittelalters." *Mitteilungen des Instituts für Österreichische Geschichtsforschung* 87: 301-15.
- Fleming, R. 1987. "Domesday Book and the Tenurial Revolution." In *Anglo-Norman Studies IX. Proceedings of the Battle Conference, 1986*, 87-102. Woodbridge: Boydell.
- Flori, J. 1986. *L'essor de la chevalerie XIe-XIIIe siècles*. Geneva: Droz.
- Gallia Christiana in provincias ecclesiasticas distributa*. 1715-1865. 16 vols. Paris: V. Palme.
- García Moreno, L. A. 1974. *Prosopografía del reino visigodo de Toledo*. Salamanca: Universidad de Salamanca.
- Génicot, L. 1962. "La noblesse au Moyen Age dans l'ancienne 'Francie'." *AESC* 17: 1-22.
- Génicot, L. 1968. "Haut clergé et noblesse dans le diocèse de Liège du XIe au XVe siècle." In *Adel und Kirche. Gerd Tellenbach zum 65. Geburtstag dargebracht von Freunden und Schülern*. 237-58. Freiburg: Herder.
- Geuenich, D. 1986. "Eine Datenbank zur Erforschung mittelalterlicher Personen und Personengruppen." In *MLH*, 405-17.
- Gottfried, R. S. 1984. "English Medical Practitioners, 1340-1530." *Bulletin of the History of Medicine* 58: 164-82.
- Greenway, D. E. 1980. "Cathedral Clergy in England and Wales: Fasti Ecclesiae Anglicanae." *MP* 1(1): 15-22.
- Hammar, C. I., Jr. 1978. "Anatomy of an Oligarchy: The Oxford Town Council in the 15th and 16th Centuries." *Journal of British Studies* 18: 1-27.
- Harvey, J. 1987. *English Mediaeval Architects: A Biographical Dictionary to 1500*. 2d ed. Gloucester: Sutton (1st ed., 1954).
- Heinzelmann, M. 1982a. "Neuerscheinungen der Jahre 1979-80 zur Prosopographie des Frühmittelalters (5.-10. Jahrhundert). Eine kommentierte Bibliographie zu Publikationen der Länder Benelux, Deutschland, Frankreich, Oesterreich, Schweiz." *MP* 3(1): 113-42.
- Heinzelmann, M. 1982b. "Gallische Prosopographie, 260-527." *Prosopographica IV. Francia* 10: 531-718.
- \*Hlawitschka, E. 1960. *Franken, Alemannen, Bayern und Burgunder in Oberitalien (774-962)*. Freiburg im Breisgau: E. Albert.
- Informatique et Prosopographie*. 1985. Table Ronde CNRS. Edited by H. Millet. Paris: CNRS. [「略記・略号」欄を参照]
- Jacquart, D. 1981. *Le milieu médical en France du XIIe au XVe siècle*. Geneva: Droz.
- Jarnut, J. 1972. *Prosopographische und sozialgeschichtliche Studien zum Langobardenreiche in Italien (568-*

- 774). Bonn: L. Rohrscheid.
- Jarnut, J. 1979. *Bergamo, 568-1098. Verfassungs-, Sozial- und Wirtschaftsgeschichte einer Lombardischen Stadt im Mittelalter*. Wiesbaden: Steiner.
- Kamp, N. 1973-75. *Kirche und Monarchie im Staufischen Königreich Sizilien. Vol. 1. Prosopographische Grundlegung: Bistümer und Bischöfe des Königreichs, 1194-1266*. 3vols. Munich: W. Fink.
- Kealey, E. 1981. *Medieval Medicus. A Social History of Anglo-Norman Medicine*. Baltimore: Johns Hopkins UP.
- (Die) *Klostergemeinschaft von Fulda im früheren Mittelalter*. 1978. Unter Mitwirkung von Gerd Althoff, Eckhard Freise, Dieter Geuenich, Franz-Josef Jakobi, Hermann Kamp, Otto Gerhard Oexle, Mechthild Sandmann, Joachim Wollash, Siegfried Zorkendorfer. Edited by Karl Schmid. Münstersche Mittelalter-Schriften 8/1, 2.1-3.3. Munich: W. Fink.
- Lemarignier, J. F. 1965. *Le gouvernement royal aux premiers temps capétiens (987-1107)*. Paris: Picard.
- Levillain, L. 1934-35. "Adémar de Chabannes généalogiste." *Bulletin de la Société des Antiquaires de l'Ouest*: 237-63.
- Liber memorialis von Remiremont* (Monumenta Germaniae Historica, Libri memoriales 1). 1970. Edited by Eduard Hlawitschka, Karl Schmid and Gerd Tellenbach. Dublin: Weidmann.
- (Der) *Liber Vitae von Corvey* (Veröffentlichungen der Historischen Kommission Westfalens). 1983. Edited by Karl Schmid and Joachim Wollasch. Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert.
- Longnon, J. 1978. *Les compagnons de Villehardouin. Recherches sur les croisés de la 4e croisade*. Geneva: Droz.
- Materialien und Untersuchungen zum Verbrüderungsbuch und zu den älteren Urkunden des Stiftsarchivs St. Gallen. Subsidia Sangallensia I*. 1986. St. Galler Kultur und Geschichte 10. Edited by Michael Borgolte, Dieter Geuenich and Karl Schmid. Sarganserländische Buchdruckerei.
- Mathisen, R. 1979. "Resistance and Reconciliation: Majorian and the Gallic Aristocracy after the Fall of Avitus." *Prosopographia II. Francia* 7: 597-628.
- Mathisen, R. W. 1981. "Late Roman Prosopography in the West, A.D. 260-640: A Survey of Recent Work." *MP* 2(1): 1-12.
- \*Mathisen, R. W. 1986. "Fifteen years of *P. L. R. E.*: compliments, complaints and caveats." *MP* 7(1): 1-37.
- Mathisen, R. 1988. "Medieval Prosopography and Computers: Theoretical and Methodological Considerations." *MP* 9(2): 73-128.
- McFarlane, K. 1973. *The Nobility of Later Medieval England*. Oxford: Clarendon Press.
- McLaughlin, M. M. 1987. "Looking for Medieval Women: An Interim Report on the Project 'Women's Religious Life and Communities A.D. 500-1500.'" *MP* 8(1): 61-91.
- Medieval Lives and the Historian: Studies in Medieval Prosopography*. 1986. Proceedings of the 1st International Interdisciplinary Conference on Medieval Prosopography, University of Bielefeld, 3-5 December, 1982. Kalamazoo: Medieval Institute Publications. [「略記・略号」欄を参照]
- Ménagier, L.-R. 1981. "Inventaires des familles normandes et francques émigrées en Italie méridionale et en Sicile XIe-XIIe siècles." In *Hommes et Institutions de l'Italie normande*. London: Variorum Reprint.
- Millet, H. 1982. *Les chanoines du chapitre cathédral de Laon, 1272-1412*. Rome: Ecole française de Rome.
- Murray, A. 1983. *Germanic Kinship Structure: Studies in Law and Society in Antiquity and the Early Middle Ages*. Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies.
- Neiske, Franz. 1979. *Das ältere Necrolog des Klosters S. Savino in Piacenza*. Münstersche Mittelalter-Schriften 36. Edition und Untersuchung der Anlage. Munich: W. Fink.

- Newman, W. M. 1971. *Les seigneurs de Nesle en Picardie, XIIIe-XIIIe siècle: leurs chartes et leur histoire: Etude sur la noblesse régionale ecclésiastique et laïque*. 2 vols. Philadelphia: American Philosophical Society.
- Nicolet, C. 1970. "Prosopographie et histoire sociale: Rome et l'Italie à l'époque républicaine." *AESC* 25: 1209-28.
- Oexle, O. G. 1978. *Forschungen zu monastischen und geistlichen Gemeinschaften im westfränkischen Bereich*. Munich: W. Fink.
- Painter, S. 1967. *William Marshal: Knight-Errant, Baron, and Regent of England*. Baltimore: Johns Hopkins UP.
- Paravicini Bagliani, A. 1986. "Pour une approche prosopographique de la cour pontificale du XIIIe siècle. Problèmes de méthode." In *MLH*, 113-20.
- Poos, L. R. 1986. "Peasant 'Biographies' from Medieval England." In *MLH*, 201-14.
- Powell, J. M. 1986. *Anatomy of a Crusade, 1213-1221*. Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press.
- Prosopographie chrétienne du Bas-Empire*. I. A. Mandouze. 1982. *Prosopographie de l'Afrique chrétienne 303-533*. Paris: CNRS.
- \**Prosopographie chrétienne du Bas-Empire*. II. Ch. and L. Pietri 1999. *Prosopographie de l'Italie chrétienne 313-604*. Paris: Ecole Française de Rome.
- Prosopographie et Genèse de l'Etat moderne*. 1986. Edited by Fr. Autrand. Paris: Ecole Normale Supérieure de jeunes filles. [「略記・略号」欄を参照]
- (*The Prosopography of the Later Roman Empire*. A. H. M. Jones, J. R. Martindale, and J. Morris. 1971-92. Vol. 1: A.D. 260-395 (1971). Vol. 2: A.D. 395-527 (1980). \*Vol. 3: A.D. 527-641 (1992). Cambridge: Cambridge UP. [「略記・略号」欄を参照])
- Raftis, J. A. 1974. *Warboys: 200 Years in the Life of an English Mediaeval Village*. Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies.
- Raftis, J. A. 1982. *A Small Town in Late Medieval England: Godmanchester, 1278-1400*. Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies.
- Renardy, Chr. 1981. *Les maîtres universitaires du diocèse de Liège: répertoire biographique, 1140-1350*. Paris: les Belles Lettres.
- Rogozinski, J. 1976. "Ennoblement by the Crown and Social Stratification in France, 1285-1322. A Prosopographical Survey." In *Order and Innovation in the Middle Ages: Essays in Honor of Joseph R. Strayer*, 273-92. Princeton: Princeton UP.
- Rotz, R. 1975. "Urban Upsprings in Germany: Revolutionary or Refomist? The Case of Brunswick 1374." *Viator* 4: 207-23.
- Rotz, R. 1976. "Investigating Urban Upspring with Examples from Hanseatic Towns, 1374-1416." In *Order and Innovation in the Middle Ages: Essays in Honor of Joseph R. Strayer*, 215-33. Princeton: Princeton UP.
- Russel, J. C. 1937. "Social Status at the Court of King John." *Speculum* 11: 319-28.
- Saul, N. 1981. *Knights and Esquires: the Gloucestershire Gentry in the 14th century*. Oxford: Clarendon Press.
- Schmid, K. 1957. "Zur Problematik von Familie, Sippe und Geschlecht, Haus und Dynastie beim mittelalterlichen Adel." *Zeitschrift für die Geschichte des Oberrheins* 107: 1-62.
- Schmid, K. 1974. "Der 'Freiburger Arbeitskreis', Gerd Tellenbach zum 70. Geburtstag." *Zeitschrift für die Geschichte des Oberrheins* 131: 344-47.
- Schmid, K. and J. Wollasch. 1975. "*Societas et Fraternitas*. Begründung eines kommentierten Quellenwerkes zur Erforschung der Personen und Personengruppen des Mittelalters." *FMH* 9: 1-48.

- Selle-Hosbach, K. 1974. *Prosopographie merowingischer Amtsträger in der Zeit von 511 bis 613*. Bonn: Dr. Rheinische Friedrich-Wilhelm-Universität.
- Series episcoporum ecclesiae catholicae*. 1873. Edited by P. B. Gams. Ratiabonae: Manz (Graz: Akademischer Druck, 1957).
- Series episcoporum ecclesiae catholicae occidentalis ab initio usque ad annum MCXCVIII*. Series 5 Germania. The "New" Gams. Edited by S. Weinfurter and Odilo Engels.
- I. *Archiepiscopatus Coloniensis*. 1982. With collaboration of H. Kluger and E. Pack. Stuttgart: A. Hiersemann.
- II. *Archiepiscopatus Hammaburgensis sive Bremensis*. 1984. With collaboration of H. Kluger, E. Pack, and R. Grosse. Stuttgart: A. Hiersemann.
- Stelling-Michaud, S. 1955. *L'Université de Bologne et la pénétration des droits romain et canonique en Suisse aux XIIIe et XIVe siècles*. Geneva: Droz.
- (Die) *Synopse der chuniacensischen Necrologien*. 1982. Münstersche Mittelalter-Schriften 39. Unter Mitarbeit von Wolf-D. Heim, J. Mehne, F. Neiske, D. Poeck. Edited by J. Wollasch. 2 vols. Munich: W. Fink.
- Stone, L. 1972. "Prosopography." In *Historical Studies Today*. Edited by F. Gilbert and S. Graubard. New York: Norton.
- Talbot, C. H., and E. A. Hammond. 1965. *The Medical Practitioners in Medieval England*. London: Wellcome Historical Medical Library.
- Tellenbach, G. 1939. *Königtum und Stämme in der Werdezeit des deutschen Reiches*. Weimar: H. Bohlau.
- Tellenbach, G. 1957. "Zur Bedeutung der Personenforschung für de Erkenntnis des früheren Mittelalters." In *Freiburger Universitätsreden*. Freiburg: H. F. Schulz.
- Thomson, W. R. 1975. *Friars in the Cathedral: The First Franciscan Bishops, 1226-1261*. Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies.
- Thrupp, S. 1948. *The Merchant Class of Medieval London, 1300-1500*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- (Die) *Totenbücher von Merseburg, Magdeburg und Lüneburg*. 1983. Monumenta Germaniae Historica, Libri memoriales et necrologia. Nova series 2. Anhang: Register zum Totenbuch von Lüneburg. Edited by G. Althoff and J. Wollasch. Hannover: Hahns.
- Turner, R. V. 1985. *The English Judiciary in the Age of Glanvill and Bracton, c. 1176-1239*. Cambridge: Cambridge UP.
- Turner, R. V. 1988. *Men Raised from the Dust: Administrative Service and Upward Mobility in Angevin England*. Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press.
- (Das) *Verbrüderungsbuch der Abtei Reichenau*. 1979. Monumenta Germaniae Historica, Libri memoriales et necrologia. Nova series 1. Edited by Johanne Autenrieth, Dieter Geuenich und Karl Schmid.
- Weinfurter, S. 1986. "'Series episcoporum' - Probleme und Möglichkeiten einer Prosopographie des früh- und hochmittelalterlichen Episkopats." In *MLH*, 97-111.
- Werner, K. F. 1958-60. "Untersuchungen zur Frühgeschichte des Französischen Fürstentums." *Die Welt als Geschichte*, 18(1958): 256-89 ; 19(1959): 146-93 ; 20(1960): 87-119.
- Werner, K. F. 1977. "Problematik und erste Ergebnisse des Forschungsvorhabens PROL (Prosopographia Regnorum Orbis Latini). Zur Geschichte der west- und mitteleuropäischen Oberschichten bis zum 12. Jahrhundert." In *Quellen und Forschungen aus italienischen Archiven und Bibliotheken* 57: 69-87.
- Werner, K. F. 1979. "The Important Noble Families in the Kingdom of Charlemagne: A Prosopographical Study of the Relationship between King and Nobility in the Early Middle Ages." In *The Medieval Nobility: Studies on the Ruling Classes of France and Germany from the 6th to the 12th Century*, 137-202. Edited by T. Reuter. Amsterdam: North-Holland.



- Wickersheimer, E. 1936. *Dictionnaire biographique des médecins en France au Moyen Age*. 2vols. Paris: Droz.
- \*Wojtecki, D. 1971. *Studien zur Personengeschichte des Deutschen Ordens im 13. Jahrhundert*. Wiesbaden: F. Steiner.
- Wollasch, J. 1959. "Königtum, Adel und Kloster im Berry während des 10. Jahrhunderts." in *Neue Forschungen über Cluny und die Cluniacenser*. 17-165. Edited by G. Tellenbach. Freiburg: Herder.
- Wriedt, K. 1986. "Amtsträger in norddeutschen Städten des Spätmittelalters." In *MLH*, 227-34.
- Zielinski, H. 1984. *Der Reichsepiskopat in spätottonischer und salischer Zeit, 1002-1125*. Wiesbaden: F. Steiner.

## 註

- 1 George BEECH, Prosopography, in James M. POWELL (ed.), *Medieval Studies. An Introduction*, 2nd ed., Syracuse, N.Y., Syracuse University Press, 1992, p. 185-226 (1st ed., 1976).
- 2 原著論文の本文中に言及された文献が同末尾の「文献目録」自体に欠けている場合、可能な限り検索して追加したが、掲載できなかったものもある。また、文献目録の掲示の形式は原著者のスタイルを維持するよう心がけたが、煩雑を避けるためごく一部は略記した。また、NACSIS Webcat等を活用し、明らかに誤植と思われるものについては修正を施した。最近の動向については、例えば、オクスフォード大学のリナカー・カレッジ(Linacre College, Oxford)におけるプロソポグラフィ研究部門のHP(<http://users.ox.ac.uk/~prosp/>) および藤井美男「近代国家形成過程における都市エリートの学説史的検討——対象と方法をめぐって——」『経済学研究』66-5/6、2000年、43-65頁(同『ブルゴーニュ国家とブリュッセル——財政をめぐるの形成期近代国家と中世都市——』ミネルヴァ書房、2007年、第4章に再録)を参照のこと。また、関連情報をご教示下さった柏倉知秀氏に謝意を表したい。
- 3 各章の主題は「ラテン古書体学」、「文書形式学」、「古銭学」、「考古学」、「コンピュータによる統計資料分析」、「中世暦学」、「中世英文学」、「中世ラテン哲学」、「中世の法律」、「中世の科学と自然哲学」、「中世美術」、「中世音楽」である。
- 4 高山博・池上俊一編『西洋中世学入門』東京大学出版会、2005年。
- 5 例えば、藤井美男・田北廣道編著『ヨーロッパ中世世界の動態像——史料と理論の対話——(森本芳樹先生古稀記念論集)』九州大学出版会、2004年、國方敬司・直江眞一編『史料が語る中世ヨーロッパ』刀水書房、2004年、鶴島博和・春田直紀編著『日英中世史料論』日本経済評論社、2008年。
- 6 プロソポグラフィが、集団の特徴を構成員の量的分析から得るために、個々の人間の質的な側面を捨象し、静態的になる傾向があることもしばしば指摘されるところではある。しかしながら、伝統的な制度史は、制度がその内部の人間次第で大きく歪められることを考慮に入れなかった点で極めてナイーブであり、プロソポグラフィが制度と人間の相互作用をクローズアップした意義は大きいように思われる。詳しくは、藤井「近代国家形成過程」54-56頁、安成英樹『フランス絶対王政とエリート官僚』日本エディタースクール出版部、1998年、7頁を参照されたい。
- 7 高山・池上編『西洋中世学入門』、146頁ほか、57、79、86、300頁。
- 8 安成『フランス絶対王政』。
- 9 なお、藤井「近代国家形成過程」は、中世後期ベルギーにおける近代国家の生成と都市との関連を中心に論じているが、80年代から90年代にかけての欧米での動向が要領よく整理されており、非常に参考になる。
- 10 <http://homepages.wmich.edu/~beech/publications.pdf>。
- 11 原著論文と対照しやすいうように各頁の最初の段落区切りを記した。なお、以下、原註と訳註が混在するが、各原註冒頭には「[原註1]」等と付記した。
- 12 [原註1] 少なくとも16世紀にはみられる「プロソポグラフィ」(prosopography)の用語は、無名の

著者によるギリシア語の「プロソポン」(*prosopon*) (英語の「人」*person*) からの造語であって、個人の外見を叙述したり研究したりすることを云う。歴史家は今日受容されている意味でこの用語を少なくとも19世紀後半までには一般的に用い始めたが、恐らく18世紀に既にそうであったろう。その意味の変化がどのようにしていつ生じたかはこれまで明らかになっていない。Nicolet 1970, 1210-11およびWerner 1979, 167-69を参照。

13 [原註2] G. Tellenbach, "Zur Bedeutung der Personenforschung für die Erkenntnis des früheren Mittelalters," *Freiburger Universitätsreden* (Freiburg: Hans Ferdinand Schulz Verlag, 1957), 10.

14 「プレヴォ」も「司教座聖堂参事会長」の意であるが、著者がフランス語の"prévôt"をそのまま使用しているので、ここでは原語のままにしておく。

15 [原註3] L. Génicot, "Haut clergé et noblesse dans le diocèse de Liège du XIe au XVe siècle," in *Adel und Kirche. Gerd Tellenbach zum 65. Geburtstag dargebracht von Freunden und Schülern* (Freiburg: Herder, 1968), 237-58.

16 [原註4] 12世紀にかかわるプロソポグラフィ研究の簡潔なサーヴェイとしてはNicolet 1970を参照。A. Chastagnol, "La prosopographie, méthode de recherche sur l'histoire du Bas-Empire," *AESC*, 25 (1970): 1229-35 ; Lawrence Stone, "Prosopography," in *Historical Studies Today*, edited by F. Gibert and S. Graubard (New York: Norton, 1972), 107-40.

17 [原註5] A. H. M. Jones, J. R. Martindale, and J. Morris, *The Prosopography of the Later Roman Empire* (Cambridge: Cambridge Univ. Press) 1(1971): A.D. 260-395, 2(1980): A.D. 395-527. [訳者補遺] 3(1992): A.D. 527-641.

18 [原註6] Stone, "Prosopography," 113-18.

19 [原註7] G. Beech, "Prosopography," *Medieval Studies: An Introduction*, edited by J. M. Powell (Syracuse Univ. Press, 1976), 155.

20 [原註8] N. Bulst and J.-Ph. Genet, eds., *Medieval Lives and the Historian: Studies in Medieval Prosopography, Proceedings of the 1st International Interdisciplinary Conference on Medieval Prosopography* (Kalamazoo: Medieval Institute Publications of Western Michigan University, 1986).

21 [原註9] *Informatique et Prosopographie, Table Ronde CNRS*, edited by H. Millet (Paris: 1985). *Prosopographie et Genèse de l'Etat Moderne*, edited by Fr. Autrand (Paris: Editions du CNRS, 1986).

22 近年、都市エリート研究はかなりの進展をみせている。差し当たり、藤井「近代国家形成過程」を参照。

23 [原註10] K. Schmid, "Der 'Freiburger Arbeitskreis', Gerd Tellenbach zum 70. Geburtstag," *Zeitschrift für die Geschichte des Oberrheins* 131(1974): 344-47. テレンバッハは、彼の学生を通じて、最近の他のどんな中世研究者よりも次世代の中世研究の方向性に大きな影響を及ぼしたと考えられる。

24 [原註11] K. Schmid and J. Wollasch, "Societas et Fraternitas," *FMH*, 9(1975): 1-48.

25 [原註12] これに関する不都合は、学問的な批判ではないが、結果的に出版費用が高くつくことであり、恐らく不運にもその学界での普及を制限したことである。

26 [原註13] *Erträge und Perspektiven der Sonderforschungsbereich 7: "Mittelalterforschung" an der Westfälischen Wilhelms-Universität in Münster* (Münster: Wilhelms-Univ. Verlag, 1981).

27 [原註14] G. Althoff, "Unerforschte Quellen aus Quellenarmer Zeit, IV. Zur Verflechtung der Führungsschichten in den Gedenkquellen des frühen 10. Jahrhunderts," in *MLH*, 37, 39 ; and D. Geuenich, "Eine Datenbank zur Erforschung mittelalterlicher Personen und Personengruppen," in *MLH*, 405, 413.

28 [原註15] 最近のロンバルドのプロソポグラフィについては、Fanning, "A Review of Lombard Prosopography," 1981を参照。

29 [原註16] この点については、Hollister, "Elite Prosopography in Saxon and Norman England," 1981を参照のこと。

30 [原註17] このデータベースから得られた最初の成果の事例としては、Fleming 1987を参照。

- 31 [原註18] フランスの代表制議会に関する最近の研究についてはBulst 1984, 1986を参照。
- 32 [原註19] 最近の出版物に関する書評としては、Burson 1982、Evans 1986を参照。
- 33 [原註20] 最も最近の巻は、Vol. 12. *Aude-Herault* (Paris: CNRS, 1988)。
- 34 [原註21] L. Levillain, "Adémar de Chabannes généalogiste," *Bulletin de la Société des Antiquaires de l'Ouest* (1934-35), 237-63.
- 35 [原註22] L. Delisle, *Rouleaux des morts du IXe au XVe siècle* (Paris: Mme. Ve J. Renouard, 1866).
- 36 [原註23] K. F. Werner, "Untersuchungen zur Frühgeschichte des Französischen Fürstentums," *Die Welt als Geschichte* (1958), 18: 256-89 ; (1959), 19: 146-93 ; (1960), 20: 87-119.
- 37 [原註24] しかしながら、今日の系図学者は、かなりざらりと並べられた辞書、百科事典、文献目録を自由に参照でき、あれこれの人や家に関して既に書かれたものを素早く見出せるという点で、1世紀以上前の先人よりも桁外れに優れた立場におかれていることは認めなければならない。この種の多くの著作はまた、数が多すぎてここで一々取り上げることはできない。末尾の文献目録を参照のこと。
- 38 [原註25] Maurice Chaume, *Recherches d'histoire chrétienne et médiévale: Mélanges publiés à la mémoire de l'historien avec une biographie* (Dijon: Académie des Sciences, Arts et Belles-lettres, 1947), 218.
- 39 [原註26] *Ibid.* ここでは女性形であるけれども、リチャード(Richard)からディック(Dick)への短縮の初期の事例である。
- 40 [原註27] M. Bloch, *Feudal Society*, vol. 2, *Social Classes and Political Organization*, L. A. Manyon, trans. (Chicago: Univ. of Chicago Press, 1961), 283-92.
- 41 [原註28] L. Génicot, "La noblesse au Moyen Age dans l'ancienne 'Francie'," *AESC*, 17(1962): 1-22.
- 42 [原註29] J. Wollasch, "Königtum, Adel und Kloster im Berry während des 10. Jahrhunderts," in *Neue Forschungen über Chuny und die Chuniacenser*, edited by G. Tellenbach (Freiburg: Herder, 1959), 17-165 ; app. 1: "Zur Verbreitung des Namens Abbo in Aquitanien bis zum Ende des 10. Jahrhunderts".
- 43 [原註30] Werner, "Untersuchungen," *Die Welt als Geschichte* (1958), pt. 2, "Zu den Anfängen des Hauses Anjou," 264-79.
- 44 [原註31] A. Murray, *Germanic Kinship Structure: Studies in Law and Society in Antiquity and the Early Middle Ages* (Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1983).
- 45 [原註32] K. Schmid, "Zur Problematik von Familie, Sippe un Geschlecht, Haus und Dynastie beim mittelalterlichen Adel," *Zeitschrift für die Geschichte des Oberrheins* 107(1957): 1-62.
- 46 [原註33] これに関しては、C. Bouchard 1986を参照のこと。
- 47 [原註34] Sidney Painter, *William Marshal: Knight-errant, Baron and Regent of England* (Baltimore: Johns Hopkins Univ. Press, 1967), 16.
- 48 [原註35] G. Duby, "Au XIIe siècle: Les jeunes dans la société aristocratique dans la France du Nord-Ouest," *AESC*, 19(1964): 835-47.
- 49 [原註36] Settimane di studio del centro italiano di studi sull' alto medioevo, no. 24, *Il matrimonio nella societa altomedievale* (Spoleto: Presso de la sede del Centro, 1977) 所収の論文を参照。
- 50 [原註37] G. Beech, "Personal Titles and Social Classes in Medieval France from the 9th to the 12th Century," paper delivered at the American Historical Association Convention, December 30, 1971, New York City. 11-12世紀フランスにおける「milites」の社会的重要性の尺度としての称号の使用に関しては、J. Flori, *L'essor de la chevalerie XIe-XIIe siècles* (Geneva : Droz, 1986), 120.
- 51 [原註38] *Ibid.*
- 52 [原註39] J. C. Russel, "Social Status at the Court of King John," *Speculum* 11(1937): 319-28. 中世前期の証人リストの格付けに関する研究についての最近の概要は、H. Fichtenau, "Die Reihung der Zeugen in Urkunden des frühen Mittelalters," *Mitteilungen des Instituts für Österreichische*

*Geschichtsforschung* 87(1979): 301-15.

53 [原註40] J. F. Lemarignier, *Le gouvernement royal aux premiers temps capétiens (987-1107)* (Paris: Picard, 1965), 128-30.

54 アスタリスク (\*) は訳者が追加した文献である。

[付記] 本稿は、平成20年度科学研究費補助金（若手研究B）による研究成果の一部である。